

寺本婉雅『西藏蒙古旅行に於る報告』（1905年）翻刻

和田，大知

<https://doi.org/10.15017/4403433>

出版情報：九州大学東洋史論集．48，pp.1-56，2021-03-26．The Association of Oriental History, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



寺本婉雅『西藏蒙古旅行に於る報告』 (1905年) 翻刻

和田大知

解題

今回翻刻を行った『西藏蒙古旅行に於る報告』は、1904年に邦人として3番目にチベット、ラサへと到達した真宗大谷派（東本願寺）の僧侶、寺本婉雅（1872-1940）が、帰国直後の1905年11月28日付で大本営に提出し、後に参謀本部よって印行された報告書である⁽¹⁾。1ページあたり35文字×15行（縦書き）、表紙、裏表紙を除いて全82ページの活版印刷冊子であり、表紙には東亜研究所の所蔵印と「東亜研究所16.4.15購入」の押印がされている。本資料はアメリカ議会図書館（Library of Congress, Washington D.C.）のAsian Divisionに所蔵されるものであり、管見の限り現在日本国内で同資料を所蔵、閲覧に付している施設は存在しない⁽²⁾。本報告書には、寺本婉雅のチベット旅行に関する新たな知見が多く含まれているとともに、その参謀本部への提出が、その後の日本の対チベットアプローチに大きな影響を与えたであろうことが強く推測される内容となっている。清朝末期のチベット、モンゴルを踏査した邦人による見聞記録としての一次史料であり、

(1) 本報告書の表紙には「大本営陸軍幕僚」の印字が、又報告書内目次の末尾には「明治三十五年十一月二十八日」との記載がある。また、寺本婉雅著 横地祥原編『藏蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）内の「寺本婉雅略年譜」1905年11月の欄には「大本営宛報告書提出。後ち参謀本部より印行せらる。」との記載があることから、本資料は年譜内における「参謀本部より印行せら」れた「大本営宛報告書」と同一のものと考えられる。また『藏蒙旅日記』359頁で横地祥原はかつて「『西藏旅古記』と題する参謀本部刊行の報告書が唯一冊あった」と述べたうえで、これがその後失われしまったために、その報告書の構成に類似した1905年10月31日開催の「参謀本部に於ける講演メモ」を『藏蒙旅日記』付録内に収録したとしている。本報告書は上記講演会の内容を基にしている可能性が高い。

(2) Library of Congress, CALL NUMBER: CLC U21 no. 1017 Japan, Request in Asian Reading Room (Jefferson, LJ150), LCCN: 2013385935.

また当時の日本の大陸、特に藏、蒙、滿方面におけるインテリジェンス活動の展開を研究するうえでも有用な資料であるといえるだろう⁽³⁾。

以下、寺本が本報告書を提出するに至った経緯を簡潔に紹介する。1898年にラサ入りを志して北京を訪れた寺本は、同地の日本公使館に出入りしつつ入藏準備を進め、その後同時期にチベット入りを行おうとしていた東本願寺の能海寛と合流して東チベットからの入藏を開始した。しかし両氏は、巴塘まで到達したものの、それ以上の進入はチベット側の官吏によって阻まれることとなった。その後帰国した寺本は、国内で小笠原長生、福島安正といった所謂「支那通」の軍人の知遇を得て⁽⁴⁾、1900年に義和団事件の争乱が拡大すると、陸軍第五師団に通訳官として同行することで再度北京を訪れた。この時同地のチベット仏教センター、雍和宮内に人脈を形成することに成功した寺本は、翌1901年に雍和宮の総監を務めるアキャ＝ホトクトを日本に招請した⁽⁵⁾。1902年から3年かけて行われた寺本のチベット旅行は、このアキャ＝ホトクトの協力を期待してなされたものであった。

アキャ＝ホトクトの帰国後、1901年末に雍和宮を訪れた寺本は、当時ドロノールに滞在していたアキャ＝ホトクトと連絡をとりつつ、彼が青海に赴く際にはそれに同行することで、最終的にはラサ入りを達成しようと考えていた。しかし寺本の目論見に反してアキャ＝ホトクトの青海への出立は遅延し続けた。結果的に寺本がアキャ＝ホトクトと合流して青海クンブ大僧院に到着したのは1903年2月25日、そして実際に寺本が同地からラサへと出立したのは、さらに2年後の1905年2月25日のことであった。1905年5月にラサに到達した寺本は、21日間の滞在の後に同地を離れてイ

(3) 本資料はすでに、小林亮介「ダライ・ラマ十三世の川島浪速宛書簡にみるチベット・日本関係——日露戦争とチベット問題——」（『史滴』41号、2019年）及び同「日本チベットの邂逅と辛亥革命——チベット仏教圏の近代と日本仏教界」（マシュー・オーガスティン編『明治維新を問い直す——日本とアジアの近現代』九州大学出版会、2020年）が参照しているほか、拙稿「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」（『史滴』41号、2019年）も本資料をもとに、寺本が同時代のチベット仏教世界をどのように理解していたのかについて紹介した。

(4) 高本康子・三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」（『真宗総合研究所研究紀要』31号、2012年）

(5) 義和団事件前後の寺本の北京での活動については和田前掲「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」に、アキャ＝ホトクトの来日については、高本康子「明治期日本と「喇嘛教」——北京雍和宮活仏阿嘉呼图克图的来日を中心として——」（白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会：チベット、探検隊、辛亥革命』勉誠出版、2011年）に詳しい。

ンドへと南下し、8月末頃にカルカッタへと到着した。そして同年10月に日本に帰国すると、翌11月に本報告書を提出したのである。

本報告書は「一、諸論」から「十一、結論」までの全11章から成っており、その章題、目次は以下のとおりである。

- 一、緒論（1-3ページ）
- 二、支那屬國としての西藏沿革史（3-8ページ）
- 三、蒙古と西藏との關係（9-11ページ）
- 四、支那と蒙古との關係（11-13ページ）
- 五、西藏の獨立に就いて（14-17ページ）
- 六、蒙古の獨立に就いて（17-21ページ）
- 七、藏蒙二國と露との關係（20-45ページ / 「報告書 北京日本公使館に送りし者」 32-45ページ）
- 八、英國と西藏との關係（45-49ページ）
- 九、達賴國王と我國との關係（49-59ページ）
- 十、滿洲經營と新事業（59-72ページ）
- 十一、結論（72-82ページ）

2章から4章では章題の通りチベット、モンゴル、清朝の歴史的な相互關係が概説されており、特に3章、4章では「達賴は清帝の大導師の任し、觀音の化身として君臨し、清國は斯教の外護者たる文殊の權化として天下に君臨し、チエプツンタンバは長城關外の禍患を保障する金剛の權化として崇敬さるは迷信的宗教上の嘯語にあらず…皇室と喇嘛教とは洵に欠くへからざる密接の關係を有するもの也」と三者の關係が示されるなど、チベット仏教世界における師弟關係や制度、そして当時のチベット仏教徒が有していた世界觀や歴史認識の説明に紙幅の多くが割かれている点が興味深い。5章から8章にかけてはそれまでの章で記された歴史觀の延長線上において、当時のチベットやモンゴルが英、露、清の間でどのような状況に置かれているのかについて述べられ、続く9章では日本がチベット、特にダライラマ13世に關係して取るべき方策の提言がなされている。10章では内モンゴルのドロンノール周辺における日本の塩湖、牧畜經營の開始が提言されており、これは寺本が1902年11月から12月にかけて、ドロンノールの彙宗寺周辺に滞在していた際の経験をもとに記されたものと思われる。

先述の通り、寺本の「西藏蒙古旅行」は足掛け3年に及び、その間のほ

とんどを雍和宮や青海クンブム大僧院といったチベット仏教徒の社会の中で過ごした。本報告書中に記された情報の多くは、寺本がこうした現地社会で入手したものにに基づいていると思われる。また寺本の記述には、今日的には一部事実としての正確性に欠けるものもあり、この点一定の留意が必要であるといえよう⁽⁶⁾。しかし一方で、チベット、モンゴルにおけるチベット仏教徒の動向に関しては、本報告が、当時の日本が入手し得た最も詳細なものであったと思われる。例えば寺本は、1904年に始まったダライラマ13世の国外移動（モンゴル、青海、北京への移動）が巡錫先のチベット仏教徒にあたえる影響について、報告書中で自身の懸念や分析を提示している。最近の研究では、この指摘がおよそ的を得ていたことが明らかになりつつある⁽⁷⁾。本報告書の特徴は、「蒙古人と化し、西藏人と化」して3年にわたって同地を旅した寺本による、現地のチベット仏教徒の動向とその軽視すべからざる影響力についての実感のこもった詳細な記述と、チベット仏教世界の存在を前提、主軸とした、チベット、モンゴル、満洲に対して日本が行うべき施策の提言にあるといえよう。

以下、本報告書が有する資料的意義について、①寺本婉雅の個人史及び探検史、②日本政府及び軍部の対チベットアプローチ、③国外移動中のダライラマ13世の動向、の3つの見地から浅見を述べて解題としたい。

① 寺本婉雅の個人史及び探検史について

これまで寺本のチベット旅行、特にラサ入りを果たした1901年から1905年にかけての第2回入藏と呼ばれる活動期間に関しては、寺本婉雅著 横地

(6) 例えば本報告中、英領インドがラサ侵攻に至った経緯についての記述や、今日ダライラマ13世の外交官としてよく知られているアグワン・ドルジェフ（報告中の「ガーワン堪布」、もしくは「ダージエフ」）の経歴についての記述には、誤りや他の人物との混同が見られる。英領インドのラサ侵攻については先行研究の枚挙にいとまがないが、ヤングハズバンド隊の侵攻開始に至る経緯について、インド総督カーゾン卿のもたらした影響等イギリス側の内情を概説したものとして Alastair Lamb, *British India and Tibet: 1766-1910*, Routledge & Kegan Paul, 1986. を挙げる。また寺本はドルジェフのことを、ロシアの東方政策に深く携わったブリヤート人のピョートル・バドマエフと混同していると思われる。同様の混同は、寺本が1908年10月25日付で在清特命全權公使伊集院彦吉に対して行って報告書中にも見受けられる（『清国ノ蒙古経営並ニ達頼喇嘛関係雑纂』（アジア歴史資料センター [JACAR] Ref. B03050601500: 画像294-295））。

(7) Ishihama Yumiko et. al, *The Resurgence of "Buddhist Government": Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*, Union Press, 2019.

祥原編『藏蒙旅日記』（芙蓉書房、1974年）（以下『藏蒙旅日記』）以外にほとんど関係する資料が見つかっておらず⁽⁸⁾、またこの『藏蒙旅日記』においても、寺本の青海クンプム僧院（塔爾寺）滞在期間（1903年2月25日-1905年2月24日）については全くとっていいほど触れられていない⁽⁹⁾。しかし本報告書第7章の中には、光緒三十年旧十月（1904年11-12月）中にクンプム僧院の寺本婉雅から在北京日本公使館に宛てられた「報告書 北京日本公使館に送りし者」が引用されており、この間の寺本の活動の一端が詳細に記されている。これによれば、寺本は光緒三十年旧四月（1904年5-6月）頃、塔爾寺に集まるラサ行きの集団に入り混じって入藏を行おうとしたが果たせず、その後旧五月初八日（6月21日）に黒龍江から来たダライラマへの使節「蒙古人パールン堪布」の一行と共にラサへと出発している。その道中、英領インドの侵攻を受けてラサを離れたダライラマ13世が青海方面へと接近していることを知った寺本の一行は、その経由地であるタイジノル（臺吉諾爾）へと赴き、旧七月二十五日（9月4日）、同地に到着したダライラマを目撃することになる。同月二十九日（9月8日）、ダライラマがタイジノルを離れると寺本も同地を出立、旧八月十八日（9月27日）にクンプム僧院へと引き返し、事情を僧院関係者に諮ると共に、事態の推移や関係各所の対応を観察している。

また『西藏蒙古旅行に於る報告』に記載されたチベット、モンゴルを巡

(8) 近年寺本婉雅に関する新出資料がもたらされた。三宅伸一郎 高本康子「『宗林寺資料』『村岡家資料』に対する総合的評価」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』34号、2017年）によれば、その中には寺本がチベットに赴く前の北京滞在中（1901年11月27日-1902年9月26日）の日記（ただし出版等を意識して後から書き直された原稿）が含まれているとの事である。

(9) 『藏蒙旅日記』によれば、1903年にアキャ＝ホトクトに付き従って塔爾寺に到着した寺本は「到着して以来、入藏に就て阿嘉に談ずること屢々なりしかども、多く要領得ず、当分此地に滞在して藏文研究に身を委ね、以て他日の機を待たんと心を定め」ていたものの、その後「悠々として二ケ年の歳月を空過したるが如しと雖、余が惨憺たる苦心に至りては殆ど月日の流るるを忘れしめたり。余が命の綱と頼みし阿嘉呼図克図は、露国の懷柔策に心を動かされて、半途にして余を棄つるに至りぬ…二ケ年の間種々の艱難と辛苦は余を襲ひしも、西藏の事情をさぐり、旅行の苦難を耐ふるに就いては大いに得るところありしを余の最も幸とする所に…」と述べている（『藏蒙旅日記』147; 150頁）。ラサまでの同行を予定していたアキャ＝ホトクトと別れた寺本が、その後塔爾寺付近に留まって入藏のための準備活動していた様子が伺えるものの、その詳細は不明であった。

る情勢と、それについての寺本の見解は、とりもなおさず寺本がこの入蔵旅行を経て関心を傾けた対象と、当時の目的意識を反映したものと言える。『藏蒙旅日記』は寺本の弟子にあたる横地祥原が、寺本が残した日記やメモを通時的に並べなおすことで編纂したものであり、日記内所々の記述が、それぞれどのような目的で、誰の閲覧に供されることを前提に記されたのかについては明らかになっておらず、未だ史料批判の余地が残るところである。

さて、同旅日記第一部（1898年から1899年にかけての東チベット旅行）、第三部（1906年から1908年にかけての青海クンブ僧院でのダライラマとの接触）、第四部（1908年の五台山行き）では、寺本が現地で接触した人物の人名や人的関係の詳細が、寺本自身の旅、滞在の目的等と相関して記されている様子が多々見受けられる。一方で、第二部（1902年から1905年にかけての青海での滞在とラサ入り）では、自身の道中、旅程に関する地理学的な情報や、見聞した現地の文化等に関する百科事典的記述がほとんどで、その他の部に見受けられるような、寺本自身が旅中に有していたであろう諸関心や構築した人間関係がほとんど文面上に表れていないといえる⁽¹⁰⁾。本報告からは、『藏蒙旅日記』第二部において脱落していた、当該期間における寺本自身の国際情勢についての関心や、自身の旅行についての目的意識及び事実認識の程度を少なからず拾い上げることができよう。

② 日本政府及び軍部の対チベットアプローチについて

この報告書が提出された翌1906年8月23日、寺本は参謀本部や大隈重信等の後援を受けて再度青海クンブ僧院に入り、その翌年11月まで同地に滞在した。この間、モンゴルから青海へと巡錫して来たダライラマ13世と接触を果たした寺本は、ダライラマに対して北京への参朝を促すとともに、日本へのチベット使節及び留学生派遣についての交渉も行っていた⁽¹¹⁾。ま

(10) 『藏蒙旅日記』第二部に該当する寺本の手になる旅行記の存在やその原稿内容に関しては和田前掲「寺本婉雅の対チベット活動とその人物像」で論じた。

(11) 寺本はチベット使節や留学生を日本に派遣するため、1907年6月24日付で日本公使館への紹介状草稿を作成している（『藏蒙旅日記』236-237頁）。また青海から大隈重信に宛てた書簡（1907年11月20日付）の中では、ダライラマと十数度にわたって面談する中で、ダライラマの北京参朝とチベット使節の海外視察派遣の重要性について説得しつつあったと報告している（早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書7』みすず書房、2006年、397-398頁）。

た1908年8月には山西省五台山において真宗本願寺派（西本願寺）法主大谷光瑞の名代、大谷尊由がダライラマとの会見を果たし⁽¹²⁾、その後ダライラマが北京を訪問すると、寺本は北京からダライラマを日本に招聘するための活動を展開した⁽¹³⁾。特に五台山における日藏仏教界の交流については、参謀本部の福島安正や在北京日本公使館付武官の青木宣純が積極的に協力を行っていた。寺本は本報告書の9章中で、「日本か啻に達頼を北京輦下に誘引するに留まらず、清朝の利益を口實として、直接達頼を日本に観光を促すこと」を「最も刻下の急務たる問題」としたうえで、「之に關して各國の關係を生ずる恐れある場合には、日本宗教問題として方法を行はゞ各國の疑懼を免るゝへし…我政府にして外交上這般の方法を斷行すること能はずとせば、表面上日本佛教者の名義を以てするも、外交上の避難を避けること易々たるのみ」と記している。こうした提案が実際にどのように検討され、一部なりとも採択されたのか、その経緯は不明である。しかし少なくとも提議を受けた参謀本部が、その後の寺本のダライラマへの接近活動への支援を行っていることから、本報告が日本の対チベットアプローチの展開過程における一つの契機であったことは間違いないであろう。そして日本政府、軍部のチベット、ダライラマへの接近方針や方策は、まさに寺本が本報告書中で挙げた提案に沿って展開したのである。

また寺本は本報告書9章中で、「滿洲人悉く喇嘛教によりて支配せらるゝ也…、日本にして滿洲經營に力を致さんとせば、其滿洲人の起りし所以、滿洲人の志想、信念の狀態、風俗習慣を察せざるへからず…即ち彼等民族の思想に投して適宜の方法を行ふは、爲政者の着眼すべき點にして、民心を収攬する第一條件たらすんはあるへからず。…去れば清皇室の大導師として崇敬を拂いし、達頼喇嘛の招喚は、滿洲經營上看過すへからざる重大の事なりとす…達頼を我が國に引見するを得ば、滿洲喇嘛教徒の人心を柔

(12) 白須浄眞「1908（明治41）年8月の清国五台山における一会談とその波紋——外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第56-2号、2007年）。

(13) ダライラマの来日計画とその頓挫については、篠原昌人「明治時代の対チベット接近策——福島安正、寺本婉雅を中心に」（『軍事史学』45-1号、2009年）、澤田次郎「チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作——一八九〇年代から一九一〇年代を中心に——（一）」（『拓殖大学論集・人文・自然・人間科学研究』40号、2018年）、高本康子前掲「明治期日本と「喇嘛教」——北京雍和宮活仏阿嘉呼图克图的来日を中心として——」に詳しい。

くるを得へし」と述べ、日本がダライラマに接近することの利を日本の満洲における「為政者」としての立場と併せて論じている。「満洲国」の建国と前後して、所謂「満蒙」におけるチベット仏教の軍事、政治的利用、つまり「喇嘛教工作」は、日本の大陸政策において重要な位置を占めるようになる⁽¹⁴⁾。寺本が日露戦争直後の時点で、チベット、及びチベット仏教の持つ地政学上の重要性を指摘していることも、後の日本政府、軍部の活動を考えるうえでは興味深い事実である。

③ 国外移動中のダライラマ13世の動向について

7章内に引用された在北京日本公使館に宛てた報告書の中で寺本は、これまで不明な点の多かった、1904年にラサを脱出したダライラマ13世が青海に赴いた際の様相を、実際の目撃者として詳細に記述している。

前述の通り寺本は、黒龍江から来たダライラマへの使節「蒙古人パールン堪布」の一同に同行して青海クンブム僧院からラサを目指していた。しかし道中でダライラマ一行の先遣隊に遭遇したために、一行の本隊に合流するべくタイジノルへと赴き、同地でダライラマを目撃したのであった。寺本によれば「パールン堪布」とは「露銀三萬兩を賣して本年三月上旬當地に阿嘉胡圖克圖に露書を呈し、阿嘉邸内に於て馬騾百餘頭を購求し」たうえで「露命を賣ら」すために「達賴喇嘛に使用する」ものであった。そしてタイジノルでダライラマに合流すると「直に糧食銀兩を達賴に献し、自ら携帯せる駄馬の大半を塔爾寺に歸らしめ、従者六名を伴ひてガーワン堪布と共に達賴に扈從し」て同地を出立したという。この時ガーワン堪布ことドルジエフは「蒙古ボリヤタ人七十名を引率し、達賴を擁しつゝ急行臺吉諾爾に到着」したとされている。寺本の記述が正しければ、ダライラマは数名の供回りとラサを脱出した後、青海に至るまでにはドルジエフに率いられたブリヤート人や、ロシアからの使節として来訪していた黒龍江のパールン堪布等を一行に迎え入れていたのである。

また寺本によれば、ダライラマはタイジノル滞在中に、「余は蒙古大庫倫の大喇嘛チエブツンタンバ胡圖克圖を見んか爲めに、大庫倫に幸し、且つ先年北京變亂の際、露の占領に歸し今は露領ボリヤタ領に露より新廟を建

(14) 日本の対「喇嘛教」活動については高本康子氏の一連の優れた研究がある。概説として高本康子「日本人仏教者と「喇嘛教」」（『日本仏教総合研究』12号、2013年）をここでは挙げる。

築して安置せる二千餘年に亘る印度將來の梅檀釋迦佛を拝せん」⁽¹⁵⁾と公言し、この時点でロシア領内であるブリヤートを自身の目的地に定めていたという。チベットを離れたダライラマが、その当初よりロシア領内のチベット仏教徒との関係を重視していたことを示す貴重な情報であるといえよう⁽¹⁶⁾。

また7章内の「報告書」は、ダライラマのラサ脱出に関する青海のモンゴル王公の対応⁽¹⁷⁾や、クンブ僧院における僧達の反応についても、寺本が実見した当時の事情について詳細を記しており、特にダライラマが青海付近に巡錫したことを知ったクンブ僧院における僧達の混乱と対応は臨場感にあふれている。アキャ＝ホトクトとの関係を下地として、僧院の内部に入り込むことのできた寺本だからこそ残すことのできた記録であろう。

寺本は報告書提出当時のダライラマの対日関係についても記述を残している。11章中で寺本は、当時イフフレーに滞在していたダライラマが、「日本に航せは、達頼か北京に對する藏蒙事變の責任を、日本の威光によりて輕減せしめ、且つ日本の同一宗教の力によりて亞細亞の暗黒を破らんことを信して、日本觀光の事を夢み、竊かに人を北京雍和宮に遣はして、そか交渉を開始せんことを望み、雍和宮に「バルシー、ルビク」という使節を派遣したと「報道觀察」をもとに述べている。先行研究によると、1905年3月の時点で川島浪速及び島川毅三郎が、北京に派遣されたダライラマの使節と2度にわたって会談の機会を有しており、寺本の述べる雍和宮に遣わされたという使節はこれと同一であろうと思われる⁽¹⁸⁾。使節の目的や会談に至る経緯、交渉の内容について、寺本の「報道觀察」に基づく見解が全面的に妥当であるとは言い難いものの、日本と当時モンゴルに滞在し

(15) ここでいう「梅檀釋迦佛」とは義和団事件時にブリヤートの僧侶、もしくはコサック兵によって北京からブリヤートに持ち込まれたとされる仏像である。現在ブリヤート共和国ウランウデ市の東方250kmに所在する仏教寺院、エギトウイスキー・ダツァン(Эгитуйский дацан)に奉じられている。

(16) 国外移動中のダライラマとブリヤート人チベット仏教徒との関係については Tatiana Shaumian, *Tibet: The Great Game and Tsarist Russia*, Oxford University Press, 2000. Alexander Andreyev, *Тибет в Политике Царской, Советской и Постсоветской России*, Издательство С.-Петербургского университета, Издательство А. Терентьева «Нартанг», 2006. 及び拙稿和田大知「ダライ・ラマ十三世の移動期間(一九〇四—一九〇九)におけるブリヤート人との関係について」(『史観』181号、2019年)。

(17) この時の青海の王公の対応については石濱裕美子「20世紀初頭、チベットとモンゴルを結んだ二人のモンゴル王公：カンドー親王とクルルク貝子」(『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』29号、2018年)で検討されている。

ているダライラマが接触、交渉を開始したという情報が関係各所に流布していたものと思われる。

以上

【謝辞】

本資料は小林亮介氏(九州大学)が2017年8月31日のアメリカ議会図書館における調査の際に、同図書館のリファレンス・ライブラリアンであるCameron Penwell氏の協力のもとで発見、入手したものである。本翻刻を行う機会を賜ったことについて、上記両氏に謝意を表したい。

-
- (18) 小林前掲「ダライ・ラマ十三世の川島浪速宛書簡にみるチベット・日本関係——日露戦争とチベット問題——」によれば、この時派遣されてきた使節の名前は「バルティ・ボルック」と「プレレクウ」である。前者については寺本の記した「バルシー、ルビク」と同一人物ではないかと思われる。また前掲「清国ノ蒙古経営並ニ達頼喇嘛関係雜纂」(JACAR: B03050601500: 画像296)に見える同時期の北京への使節「バルデピーク堪布」もこれと同一人物ではないだろうか。

翻 刻

凡例

- 本文は底本記載の字句を出来る限り再現するように努め、漢字における表記ゆれは底本通り記載した。ただし一部の異体字、変体仮名、合字、記号などは現在通用しているものに改めた。また底本にあるフリガナはそのまま附した。
- 通読の利便性を考慮して本文を横書きに改めたうえで、底本にはない段落頭の一字下げを行った。また底本中統一されていなかった句読点や濁点の体裁はこれを統一して処理した。
- 一部表記のゆれに留まらない底本の誤字については改めた。改稿した箇所と底本での元の表記については文末に一覧を付した。

緒論

雪山の陰、青海の涯、獨り千秋の雪に隠くれ、長へに萬古の秘鑰を守り、今尚世界の暗黒として、第二十世紀學術の光明に照されざるもの、是れ世界の高原西藏國にあらずや、昔、堯か三苗を三危に遷しゝより、有苗の原人は、漸く別住民族として、其祖國を形成してより降て唐代文化の旺盛なる時にあたり、勇悍なる西藏人支那長安の邊を脅かし、數々太祖と干戈を交へぬ、帝之を憂ひて和睦を結び、遂に内親王文成公主を吐蕃に降嫁せしめたる悲話を史跡に残し、元代に至りて顔吉斯汗、忽必烈等か全盛を極めたるの時、パクパ喇嘛をして大元の帝師として帷幄に参せしめ、以て八荒統禦の基を開きたり、アラビヤの高原マホメット未だ回教樹立の旗を翻へさゝる時に當りて、西藏國には早くも既に佛教經典翻譯の業を全うせり、蒙古譯の大事業も主として、帝師の上足たる西藏學僧の手によりて全うせり、康熙乾隆の世に及び西藏僧帝章嘉胡圖克圖をして、滿洲語を制定せしむると同時に、滿洲語の翻譯も完成せられたり、斯の如く叙し來れば、過去史乘に於ける西藏人の宗教文學上に與へたる事跡は決して湮没すへからざるなり。

而して其宗教は、佛教並に印度教等の混合せる一種の佛教にして所謂喇嘛教是也、宗教學上さして高位の位置を占むるものにあらずと雖、深く人心の歸依を求め、且つ民族の團結を養ひし點に於て、其勢力古今未だ曾て

變せざる也、其教化の及へる版圖は廣くして大なり、東、支那境にありては、雲南、四川、甘肅省より支那内部を貫き、陝西省山西省等に至り、東北は滿洲全部より黒龍江一帶堪察加附近の地に達し、北は内外蒙古及び西伯利亞よりアルタイ山嶺を超へ露領本部に入り西は印度、中央亞細亞、東土耳其、準噶爾に及び、南はニポール、シキーム、ブータン等の各國に亘り、露領にありては六十萬の信徒、蒙古にありては六百五十萬、支那滿洲は七百萬、西藏本國は七百萬、雪山の南北一帶を合して三十一萬、總して二千餘萬人以上に達す、亦以て其勢力の侮るへからざるを知るに足らむ。

而して是等宗教文學の偉大なるは、實に西藏人の力にありと云ふも決して誇大の言にあらざるへし、去れは西藏人の研究は最も必要に屬することは亦言を待たざる所ならむ、これ吾人の蹶然として郷國を辭し、單身遠く異域の山河を跋涉し、長程幾千里、餓を忍ひ、寒に堪え、怪獸と闘ひ、蠻人に襲はれ、幾たひか瀕死の境に接して、漸く世界の秘密國に入り、其鍵鑰を握り、此に寶庫を開らき、多年の宿望を達することを得たり、吾人の志、一にそか宗教の眞底を探くるにありしと雖、吾人亦國を憂ふるもの、吾人旅行中潜心宗教以外即ち人心の趣句を察し靜かに政教一致の局面に目を注ぐことを怠らざりき、幸いに吾人の觀察にして多大の誤りなからしめんか、東亞問題に就いて多少の參考資糧に供せらるゝを得ん。

吾人の旅行、前後七星霜の久しきを閱し、蒙古西藏の事情は稍其眞相を探り得たりと信す、殊に喇嘛教以外政治もなく、習慣もなく、行事もなき彼國にありては、吾人宗教者をして恣に觀察の眼光を放つの便益を與へられたり、從て吾人の觀察は樞機を握りたる點に於て、聊か他の觀察者と其趣を異にするものあるを覺ゆ、吾人の此に陳述せんとするもの、固より吾人の専門とする所にあらされとも、東洋問題に意を傾け、殊に日本將來の發展を促すに於て、輕に看過すへからざる重要な問題あるを以て、乃ち其概要を叙しか併せて吾人の卑見を述へて、此に報告に及ふ所以也。

二、支那屬國としての西藏沿革史

西藏國の歴史は宗教によりて起り、宗教によりて滅すへき運命を有せり、開闢以來此に一千二百五十年、政治運用の中心は三寶の主權内にあり、之か一張一弛は悉く教權の本位に基かざるなく國家の隆替、概ね法運の頽否と伴はざるはなし、紀元六百年代に當りて、世界の高原に「スロンツアンガンボ」出て、勇悍なる西藏民族を牽いて^{ラサ}拉薩に根城を構へ、餘威奮て支

那の西垂を冒し、進て長安洛陽を脅かし、幾度か弓矢の間に英主唐太祖と相見え、太祖をして文成公主（内親王）を藏王に降嫁せしめたる哀史は、既に緒論に述へし所、而して藏王は同盟の餘威を藉り、印度ニポールを征服しニポール王をして、チゾン内親王を納れしめて和を講するに至る、吐蕃の英主『スロンツアンガンボ』之より二公妃の内助により、外、佛教の教典を求めて之か傳播につとめ、内、寺院を起し禮拜に便にせしより、西藏人種はこの新宗教の爲めに、文化は頓に水平線上に上り、暗黒の底裡より進て向上の曙光に接近するに至りぬ、有史以前に於ける野蠻時代の過去と又同一視すへからざるの境に達したり、西藏人民の佛教のために享受せる社會上の幸福偉大なりといふへし。

爾來西藏國は、支那の制策を奉しつゝ、世襲政治を行ひつゝ數百年を経て大元に至る大元世祖顔吉斯汗出てゝ八荒を統一するに及び、薩迦派『クンカーニンボ』の德行高きを聞き禮を厚うして之を聘し、以て帷幄の參謀となし、大に之を用いたり、忽必烈の時、又使を遣はして藏に至り、クンカヂヤムサンを聘し、自國の國語なきを耻ちて、之をして創定せしむ、彼は木版の鋸痕陰陽配合より考察して、遂に蒙古四十五文字を作住するに至る、乃ち蒙古文學此に創まる、次て世祖中統元年使を西藏に派して、ロゴンチエヂャル、パクパ喇嘛を聘し來りて、帝師に封し、授くるに玉印を以てし、天下の釋門を統一せしむ、其封に曰く。

皇天之下、一人之上、開教宜文、補治大聖、至德普覺、眞知佑國如意、大寶法王、四天佛子大元帝師、世爲彼土法王。

以て厚く任用せられたるを知るに足らむ、彼は西蕃の貴族にして、穎語非凡、五明俱通、彼は蒙古文字の不完全なるを見て、更に之を創作するに至る、現時の蒙古語是也、世祖彼を用いて天下を一流し、西、歐洲を蹂躪し、東、日本海岸を打ちて相模太郎のために一蹴せられたるも、一に傑僧パクパ喇嘛の方寸に出たり、次にパクパ喇嘛をして西藏國王となし、以て其内部を統一せしむ、明、起るに及び亦元朝の方針を襲ひ、喇嘛教を優遇し、蒙古、西藏をして無爲に化しぬ。

當時西藏は喇嘛教腐敗し、佛制に戻るに甚しきものあり、曩きに元帝はスロンツアン、ガンボの世襲政治を廢して、其弊害を矯正せんことに勉めたり、明朝も亦元朝が取り來りし方針によりて、政治的革命を永遠に防喝するの政策を取り、前代喇嘛の崩するに及て更に有徳なる喇嘛を公選して西藏國王たらしめ、かくして支那陬僻の安全を保ち、以て明末に及ひた

り、西藏國內世襲上に就きて、君權爭奪の禍は起らざりしも、喇嘛教は年と共に壤亂腐敗し來り弊害百出、世襲的政治上の弊害よりも更に其度を加ふるに至りぬ、從て宗教の生命は暗黒界に埋没し去られ、喇嘛教は遂に宗教範圍を脱して、只管政權の與奪のみこれ事とするに至る。

此時に於て甘肅の邊、黄河の上流唐古忒人種の中より、一俊傑出て、宗教改革の聲を青海湖邊に叫ひぬ、これ乃ち新教の音唱者^{ツンカハ}宗喀巴なり、大册成化十五年、彼は^{アムド}安土山間の一牧者の貧兒として呱呱の聲を擧げたり、彼は八歳にして其附近の寺院にて教育せられ、十五歳の時、笈を負ふて西藏に上り、所々の學堂に巡禮し、碩德を尋ね、一意専心斯教を勉學し、教理の深底を究めぬ、壯年に及び拉薩の東十六里、ウイチウ河邊ガルダン寺に入り、始て法幢をかゝけ、法鼓を鳴らし、教壇を設けぬ、學者碩德四方より集り來りて膝を屈し其教に隨喜せり、年四十に及び始めて舊教に對する教理の改革を習ふ、信徒群をなして新教に歸するもの歲月と共に益々増加し來れり、彼は古稀に及びて逝けり、其二大弟子及び七大弟子は遺言を信し、各地に赴いて新教を傳播す、就中彼が晩年に其弟子ゲンドウンチヴを後藏に派しチャシロンブ（大學）を開かしめ、又チャミヤン、チエヂエを派して、レボン大學を開かしめ、他の一名を派してシエラー大學を開き、以て新教の發達に力を盡くされたり、此に於てか舊教は壓せられ、新教の風下に立つに至れり、宗喀巴の死するや、彼の轉生化身を求めて西藏國王の位に就かしむ、乃ち是れを達賴喇嘛一世と稱す、彼は法王にして即ち國王也、後藏に於ける喇嘛の轉生を求めて、之を班禪喇嘛の第一世をなし、以て達賴喇嘛の配下に屬せしむ、之を副王と稱す。

達賴法王即ち國王は、立法と云ひ、行政と云ひ皆悉く教權より割り出さるなく、只兵備に關する事、財政に關する事のみ、四大臣の手によりて之を發布せしむるに過ぎず、要するに一切の政權は法王の掌中にあり西藏人民は喇嘛教によりて生活し、喇嘛教によりて支配せられ、喇嘛教によりて文化の消長を來せるもの、喇嘛教を除いて西藏國なし、政治といふも教權の働きなり、西藏人民の行動は一に教權の支配の下にあり、教權以外一の政權をも認むる能はず、教權變して政權となるとは云ひ得れとも、政治と教權との區別を見る能はず、否教權以外に政權と稱すへき事實なし、セーラ、レボン、ガルダ等の大學に於ける博士教師の言論は、直に喇嘛權即ち西藏王達賴の顧問となるも、各大學は精神的宗教及び哲學を以て組織せられたるものにして、政治上何等の思想をも教育すへき場所にあらず、凡て

の教師博士は達賴によりて左右せらるゝと同時に政治となりて社會に發表せられ、行政となりて各大臣に配布せらる、政府は達賴即ち西藏國王の配下に屬するも、政治を左右するの權なく、一立一廢の法制も悉く達賴の教權的中心より發布せらる、西藏に於ける達賴の位置は前代の轉生化身として、共和的公選によりて國位に即くと雖、獨裁的君主たるもの也。

副王班禪喇嘛パンチエンは後藏の圪什倫布宮グヤシロンブに住して、後藏全體を統治すと雖、達賴に隸屬し其政策を奉して行ふに過ぎず、所謂一種の行政官の如きものなり、兵力財政は凡て達賴の手にあるも、後藏に於ける租税徴収の權利を與へられ、其歳収の三分の二は達賴政府に納むるものとす、其人民は後藏に於ける一種の國王兼法王としてはた精神的指導者として尊敬を拂はれつゝあるはいふまでもなし、副王の一舉手一投足は藏民幾百萬の歸依に關し、併せて法音に響を及ぼすものなり、而して副王の世を去るや、達賴國王はこれか轉生たる伶俐なる嬰兒を求めて之を選び、北京朝廷の勅を請ひて副王の後を襲はしむ、若し達賴國王崩せは副王代りて之か選擇の任に當り、同しく轉生化身たる嬰兒を求めて公選して北京に奏し、達賴の位を襲はしむ、即ち教育上達賴と班禪とは相互に師傳となり、被師傳となりて其關係を政教二途に及す關鍵となるものなり。

三、蒙古と西藏との關係

亞細亞高原ホルバ地方より分れし蒙古原人種は、一は北方伊犁附近よりウリヤスタイを経て次第に東漸し、ハラハ地方に於て一大民族を形つくり、延いて黒龍口に蔓延し而して別住の原蒙古人種は南方天山南路を経て、漸次東南に移住し、故國の風土と相遠かるに従ひ、野蠻の状態を脱し、印度カシユミユルより東漸せる佛教の餘澤を蒙りつゝ、青海の涯に勇を振ひ、時には西藏民族と闘ひ、時には漢民族を黄河の上流より掃ひ、長城の北、朔外に蟠踞して以て大元に至る。

當時蒙古民族は佛教の文化に接したりと雖、未だ全く文明發展の域に進まず、大元顔吉斯汗、關外に奮起するに及び、外、蒙古人を提け、内、漢人に臨みたり、而して西藏よりクンカニンポ喇嘛を聘して大に劃策する所あり、忽必烈立つや、又パクパ喇嘛を西藏より招き、天下統一の大業に與らしめ、傍ら蒙古文字の完成に勉め、喇嘛教を奨勵すると共に、西藏語の佛典を蒙古語に翻譯し、以て蒙古文化の道を開かしめたり、蒙古人の文化に浴し、大元の大業を成就せる原因全く此にあり、爾來蒙古は喇嘛教によ

りて感化せられ、制度文物悉く之に則らざるはなし、曾て慍悍なる蒙古民族の特質は、漸次醇朴の風に化し、大元帝の政策はよく其功を全うせり、明朝起るも、前代の制を襲ひ、又喇嘛教を奨励し、各州各縣各地に大小の寺院を建て、人民をして喇嘛教の師弟たらしめんことに勉めたり、清朝滿洲の原野に起るも、亦明朝の遺政に基き、同一喇嘛教を奨励し、右に滿洲八旗を掲げ、左に察喀爾八旗を掲げ、堂々當るへからざる威風を示して漢人を統一せり、以後蒙古人は喇嘛教を奉持するの外、何等の生活もなく、何等の風習もなし、蒙古の文化は全く祖國西藏の誘導によれるもの、彼等は全く其恩恵の偉大なるものあるより、彼ら民族は西藏國を以て第二の故郷視するに至る、加之、西藏人の喇嘛教宣布と共に、西藏人の蒙古地方に移住するもの多く、人口三分の二は悉く喇嘛にして超然世俗を脱しあり、而して彼等は優遊精神界上の哲理思想に耽り、以て無上の快樂とするに至る、清朝も此風を奨威して、喇嘛を遇するに帝と同格を以てし、益々優遇を與へぬ、蒙古人は西藏語によりて教育せられ、専ら喇嘛教を研究し喇嘛に奉ずるを以て終生最大の目的とし、遂に自國制度文物、典章をも顧みざるに至る、去は蒙古と西藏とは殆んど子弟の關係の如く、西藏達賴は單に西藏一國の君主にあらずして、蒙古に於ける精神的統一の法王たるへき奇なる現象を表はすものというへし、蒙古七百萬の精神的歸着は一に西藏達賴の双肩にあり、彼等の暗黒を救ひ、彼等に光明を與ふるも、一に達賴の胸中にあり、達賴は事實上に於ける蒙古民族の精神的生殺與奪を司ると云ふも敢て過言にあらずへきか、古より今に至るも、蒙古と西藏との往來たえたることなし、寒風猛烈の高原も彼等の跋涉に任し、貿易に通商に兩國人の交情甚だ密なり、西藏歳入の一半以上は蒙古の財源に待つもの多く、蒙古の商品は西藏の輸入を相待ちて、彼等の發達を促せし所、これ既往より現在に至る事實的關係也。

四、支那と蒙古との關係

大元帝天下を統一せむとするの際、西藏より喇嘛を聘して、其劃策に與らしめ、而して喇嘛教を蒙古に宣布奨励するのみならず、伽藍を設け、莊園を付與し、豪族の師弟を容れて教育せり、一州一縣より官費を以て留學を命し、以て喇嘛教を研究せしむ、慍悍なる彼等民族をして宗教の力を藉りて柔順たらしめぬ、土地の酋長には官位を與へて實權を殺き、益々蒙古人の勢力を減し、文武の兩權に容喙せざるに至らしむ、彼等の生活をして

終生宗教上の行事禮拜を奉するを以て、其能事了れりとなさしむ、大元興起前、之か統一を計る爲め、蒙古に熱心布教して喇嘛教の光輝を放ちたる、西藏喇嘛にして有名なる史家、ゼツンターラ、ナータの轉生を世々西藏に求めて、之を大庫倫に置き北方蒙古の重鎮たらしめ外蒙古の土謝圖汗、三音諾顏汗、圪薩克圖汗、車臣汗（汗は王と譯す）の四王を其配下に隸屬せしむ、爾來歲月を閲するに従て、彼の轉生は全蒙古の統一者となるに至り、各部蒙古王及び酋長は彼の鼻息を窺ひ、彼を主權者として仰ぐに至る、これ即ちチエプツンタンバ胡圖克圖也、蒙古人を無爲に化せしめたるは全く宗教の力を用いたる也、明朝を経、清朝に及ぶも、元代の遺政を襲ふのみならず、清朝の起るや、滿洲八旗と共に蒙古八旗を提けて、支那にあたりて天下を統一したり、其功により益々喇嘛教を奨励し、チエプツンタンバ胡圖克圖を蒙古の重鎮とせるのみならず、滿洲民族は元來蒙古の分派なれば、祖先の喇嘛教信者と同様に喇嘛教を國教として、異文の文化を以て支那及び藏蒙の民心を統一するの不可能なるを知り、同教を以て異種族を統一せり、喇嘛教は滿洲皇室の由て起る所にして、又其滅亡を招く關鍵に屬す、清朝は西藏を治むるに世襲政治を廢し、公選的喇嘛政治となしたるか如く、蒙古も亦同し方針を以て之を治めたり、外には全蒙古の精神的統一者として、チエプツンタンバを大庫倫に置き、内には蒙古各地方にある高德の喇嘛八名を北京に駐在せしめ、以て宮中の大導師たらしむると共に、遠く西藏人心を吸引し、朔外蒙古人民を収攬せり、滿洲の漢民族に對しては自己固有の欠點を補はん爲め、藏僧チャンチャ胡圖克圖を帝師となし、滿洲文字を創定せしむ、大元帝か藏人の手を藉りて蒙古語の譯經を完全したるか如く、清帝又彼に滿洲語の譯經を完全せしめ、併せて蒙古、西藏、滿洲、漢の四體合璧の漢譯をも成就せしめ、以上滿州族の文明をして水平線上の位置に引き上げて漢民族に對抗せしめたり、滿洲皇室は喇嘛教國民と蒙古人と滿洲人とによりて鼎位を定めたり、去は皇室の興廢は直に蒙滿二族の歸依如何に關す、即ち喇嘛教は清朝の國教にして、清朝は國是として喇嘛教を西藏に仰ぎ、達賴は清帝の大導師の任し觀音の化身として君臨し、清國は斯教の外護者たる文殊の權化として天下に君臨し、チエプツンタンバは長城關外の禍患を保障する金剛の權化として崇敬さるゝは迷信的宗教上の嘯語にあらずして、之を北京宮裡に於て實見することを得ん、寧ろ驚嘆に價ひすへきものあらむ、乃ち宮中の百官有司は帝を稱するに陛下の言を用いすして、最高喇嘛を呼ぶに「佛爺」なる、同一の尊語を以てす

るを見ても明也、清帝は喇嘛を遇するに自己同様の黄色の冤袍衣冠を賜ひ、乗るに黄轎を許し、與ふるに親王以上の待遇を以てす帝廟の掌司の裡にあり、皇室と喇嘛教とは洵に欠くへからざる密接の關係を有するもの也、漢人の革命的思想勃興すると雖、常に帝都を南方に移し、民心を一洗する能はざるは一は漢人の革命を恐れ、一は蒙古滿洲の後援如何を慮るによるなり。

五、西藏の獨立に就いて

清朝乾隆帝の制定せる對西藏策は法王制度にして、之か爲め支那西陲の牆壁となり、支那内地幾百年間泰平無事なるを得たり、西藏掣肘策は只西藏國王を交替的制度を以て國是とし、拉薩に一の駐藏大臣を派遣して達賴の行動を監視するに過ぎず、清兵五百を前藏に駐め、三百を後藏に、其外各樞要の地に若干を配し、全駐藏支那兵は約六千に過ぎず、官吏を各要部に配置せるも、只支那官吏の西藏を往來するを督するのみ、駐藏大臣の權利は藏人一般に及はし、只達賴の行動と交替的制度を監する有名無實の虚位のみにして、其實權を西藏に施す能はず、乃ちこれ乾隆帝の定めたる無爲的政策にして、而も遠撫近諭其効を奏せし所以也。

かくして西藏は數百年の夢を貪り、清國も亦永遠の目的を達するに至れり、西藏國王は三年毎に一回北京に朝貢して、其政策を奉し、政府又宮廷に於ける式典侍讀を西藏に仰き、北京に理藩院を設け、西藏蒙古を管轄せしむ、北京に二十五大寺を建て、西藏學者を聘して、清、藏、蒙三文學を研究せしむ、其教主博士は勅命によりて達賴之か人材を選び、北京に年番交代せしむ、光祿寺、大祿寺、理藩院等の官衙は即ち之等に關する藏蒙の樞要なる事務を司る所也。

北京の雍和宮は、もと雍正帝の東宮なりしも、滿洲文字の創定者なるチャンチャ胡圖克圖^{フクトク}の偉勲を賞して之に與へ、全蒙古の官費生を召集し、博士教師を西藏より仰き、之を教育する官立學校なると共に、神聖犯すへからざる清朝皇室の菩提所たり、雍和宮は啻に學校菩提所たるのみならず坐して藏蒙二國を懷柔する唯一の機關也、是を以て彼等蒙古官費生にして來燕させるか、或は博士教師の西藏より年番交代し來らさると否とは、封の興廢に關する重大なる事柄也、之か爲め乾隆帝は遠く西藏に巡狩し、第五世達賴ローザン、チャムソ王と共劃して西藏の基礎を定めたり、第五世達賴の巡錫を北京に仰き厚禮を以て帝師となし、内は以て同教を布演して漢人の趨勢を定め、外は以て藏蒙民心の歸嚮を統へ懷遠の策よく的中し、鼎

基此に安きを告げたり。

かくて二百有餘年の泰平を謡ひつゝ現清朝は老朽の餘を受けて、政綱萎靡として振るはす、内訌外患とし、年に月に迫り、權威遠く朔外堦邊に及ぶ能はす、頑冥なる志想は外來の新思潮を吸引するの力なきも、時は急進に驅らるゝの輩崛起し、或は革命主義を抱き、或は共和政治を空想し、或は時代主義を主張して、内、益々兄弟牆にせめき、外冠此の際に乘し來り、支那幾萬の民心をして那邊に歸着せしむるかを迷はしむ、さきには英佛同盟軍輦下の盟は二百餘年の太平の夢を破りしと雖、これ一時の打撃に過ぎず、頑迷は依然として覺醒の光を認むるに能はす、老朽は益々腐蝕し來り、東亞の天地、妖雲暗澹として、危機眼前に迫まれるにあらずや、其結果は日清兩國の破裂となり、老帝國の無能を世界に暴露するに至る、爾來内訌列患交に生し、北京朝廷の位置を危うするもの屢々なりき、從て威權遠堦僻に及はさること甚たし、此に於て西藏との疎通を欠き、昔日の如く之を統轄する能はす、西藏の民心漸く離反し、清勅益々輕せられ、喇嘛教外護者としての皇室は事實上之か責任を行ふ能はさるに至る、此時に當り、英露の衝突益々迫まり、藏の邊境を脅かし來る、之を清帝に圖るも何等の防備計策のよるへきなく、達賴の言は清帝の容るゝ所とならずや、西藏國の運命兩強國の手に収められむとする危機に臨む、清朝の如何ともすること能はさるを看破し、西藏國を安全の地に置かんと志想を抱くに至れり、換言せば、西藏人の生命を支配する喇嘛教の盛衰に關する爲め、自衛の策を講し、併せて清帝の羈絆を脱して、自ら統一大任に當らむことを決せり、これ即ち達賴國王か清朝の政策を離れ以て獨立を計らむとするの原因全く此にありき。

千二百年間、唐朝より現清朝に至るまで各朝各代の封策を奉し來りし、彼れ西藏國は、現清朝の威權不振は總て彼等祖國の運命に關するを思ひ、喇嘛教の安寧を計り、外教侵略を防ぐは、自ら其任に當り、國論を統一し、西藏百年の計を廻らさんに如かしと志しぬ、此に於てか、竊に劃策する所あり、或は視察を印度に送りて英の動靜軍機如何を窺ひ、或は北蒙古を経て露領に人を遣はし、驚露の動靜を探くらしむ、内には軍器製造所を設立し英人を聘して器械製造の監督に當らしめ、租税を改革して時局の要に備へ、國庫を整理して其準備に充つ、駐藏大臣達賴の近狀に就いて疑はしきあるを求め、之か掣肘を北京に訴へ、以て達賴に通するも、達賴恬として彼等の言を奉せず、駐藏大臣又之を如何ともする能はす、只拉薩に駐まり

て支那官吏及移住者を支配するに過ぎず、北京朝の威勢遠く西藏に落ちて、達賴をして自立の念を高からしむるに至る。

六、蒙古の獨立に就いて

清朝より精神上の統一者としておかれたる、大庫倫チエブツンタンバ胡圖克圖は、北京朝廷の權威内外に振はさると共に、清帝の喇嘛教に對する禮遇又昔日の如くならさるものあり、蒙古民心の北京に對する意嚮稍々薄らき、喇嘛教以外何等の頭腦なき慄悍なる彼等は、精神的満足を買ふ能はさる結果、南方に向へる彼等民心の結合力は、轉して北方に向ひ、チエブツンタンバ胡圖克圖の言語動作は彼等心靈上の安慰となり、蒙古各地諸王官吏は、悉く彼に渴仰し随仰し、一言一行其命を奉し、遂に北京朝廷の勅に背いて敢に憚らさるに至る、在庫倫の支那官吏は彼等の遠背的行動を知りつゝ、何等の掣肘をも加ふる能はず、蒙民は北京廷の政綱紊れ威權地に落ちたるを看破して、益々北方に歸依し、日清戦争以來愈々其傾を高うし、北清事變起るに及んで、清帝西安に蒙塵するの餘儀なきに至りて、全蒙古人は支那帝國の不安なるを憂ふると共に、延いて禍亂の蒙古に及ぼすを慮り、清國の威勢關外に及ぶ能はずんは、蒙人自ら祖國を護らむとの思想は、滔々として曠漠たる平原の内に充溢し來りぬ、曾て喇嘛教の保護者として、文殊の化身として仰かれたる清帝も、内訌外患の弊を受けて、蒙古の人心を維く能はず、却て蒙人をして獨立の精神を固めしむるに至る、これ時勢の變化の然らしむる所か、而して蒙民の理想は、在庫倫チエブツンタンバ胡圖克圖は、將さに是か使命を果すべきものと思惟するに至る。

乾隆帝時代に一同朝貢せし以來二百有餘年間、其参内を欠きしチエブツンタンバ胡圖克圖は時勢の變雲を觀測し、大清帝の運命日に非なるを看、蒙古人民の抱きつゝある思想を察し、彼等の要求と希望とに應じて、勇悍なる蒙古人の特色を發揮して第二の大元たらむことを夢想し、内、清朝の變動を窺ひ、外、露國の機微を察し、時を得變に應じて其遠大の志望を擧げんことに汲々として心を悩ましつゝあり。

乾隆帝の喇嘛教遠撫策によりて蒙民悉く北京に歸依し、第一世チエブツンタンバ燕京に参内して以來、歳月を経るに従ひ、清帝政治の委靡として振はさることは、既に述べたるか如し、爲めに彼等の思想を満足せしむる能はず、遂に精神界の指導者として、彼胡圖克圖めを推して、事實上全蒙古に於ける理想上の國王たらしむるに至り、傲然北方に蟠踞して、北京に

朝貢せさること此に二百餘年、清帝之を召すあらは、幣帛巨萬に上り、宛然一獨立君主を招くか如く、彼亦其禮を厚うするにあらずんは、駕を枉けさるに至る、かゝる傲慢の風は積りて今日に及び亦如何ともする能はさるに至る、而して彼等は益々夢想を實現せんことを期圖し其趨勢は變して豫言となり、實話となり以て社會に現出するに至る、是等思潮の源泉たる、あらゆる蒙古喇嘛は、之を古典に徴し之を神巫に托し、豫言は豫言を生み、元帝顏吉斯汗、忽必烈の遺傳に照して、其再現は今日にあらむを夢み遂に彼れ胡圖克圖は顏吉斯汗の偉業を再興するものなりとの豫言書を作りて、其志想を鼓吹し、人心を擾乱しつゝあるは吾人の目撃する所也。

斯の如き思想の澎湃は露の東方經營に伴うて益々發展し、黒龍江滿洲地方は、古代蒙古人種の奮起せる古史に倣し、露の勢力亦此の邊に蔓延せるを看取して、蒙古人の特性を發揮する時期到來せる所以なりと思はしむるに至りし也、露の滿洲經營は偶々彼等の遠望を期圖するの機を與へたるものと云ふへし。

七、藏蒙二國と露との關係

彼得大帝の遺訓は東方經營となり、西伯利亞鐵道の完成となり、而して蒙古領地『ボリヤタ』を侵略すると共に、益々其手を伸へ、黒龍江一帶の經營を終り、日清事變に乘し滿洲に驥足を伸はし、北清事變に際しては、そか全部を經營完成するに至り、遠望益々其圖に當り、亞細亞全局を包含して自己の願使に従はしめんとして、『ボリヤタ』より庫倫に接近し、延いて北京の後背に出てんとするの計をなしぬ、曩きには庫倫より北京に鐵道布設を計畫し、喇嘛教によりて『ボリヤタ』領地を嘗めし策を蒙古全部に應用するの手段を施さんことに勉め、各蒙古王の尊崇し、人民の信仰の結晶、思潮の中心たる在庫倫胡圖克圖の歡心を買ひ、之に接近し露蒙肝膽相照して茲に其深謀を果さんことを約するに至る。

爾來胡圖克圖は蒙古人心の収攬に勉め、露人と共謀して領内の鑛山を採掘し軍備の供給に備へ、露人の庫倫に兵營を築き、砲臺を造るも彼等の意に任せ、永遠の志望半途にして挫折あらむを恐れ、土謝圖汗の王女を娶りて其繼嗣を擧げんことを計り、例へ自己か志遂けず半途に逝くも、繼嗣の存するあらは民心之に歸し、そか遺謀を成就するあらむを豫想せられたるに由る、用意周到なりといふへし、蒙古人民は彼れ胡圖克圖が喇嘛にして妻帯すへからさる宗規なるにも拘らず、此の蠻風の行爲を見て敢て意とせ

さるは蒙民の信念如何を察すへきにあらずや、加之、彼等蒙民の抱きつゝある志望は胡圖克圖により實現せられんことを期し、反りて之を賞揚するか如き奇なる現象を見るに至る、彼は民心を収め基礎を固め、而して露援を藉りて風雲を待つこと稍久し、彼の配下に隸屬する土謝圖汗、三音諾顏汗、扎薩克圖汗の四王又彼等志望を助援せんとして陰に陽にそか計畫をなしつゝあり。

彼の誕生會舊五月二十五日を利用して、各蒙古地方より雲來せる幾萬の駿馬を集めて競馬を催し、蒙古人の武勇を訓練し、暗に他日の變に供ふるものゝ如し、勝者には彼胡圖克圖自ら賞を賜ひ、以て民心を収攬するの一例を見ても彼等意向那邊にあるやを知るへき也、這般の行動を欽差大臣の眼前に於てなすも又之を如何ともする能はず、而して露との親交愈ゝ其度を加へ、露の使節庫倫に駐塔するは、支那官吏との交渉をなすにあらずして、直接胡圖克圖に通するか爲なりと見るも、決して經言にあらずさへきか、毎年元旦に於ける彼れ胡圖克圖の國賓は、支那欽差大臣にあらずして、露の使節にありときは、誰か其意外に喫驚せざるものあらむや。

大元顏吉斯汗の再現としての豫言は、單に迷信的豫言其者に終らすして、事實に於て之を認め得へし、乃ち彼は東方に於ける露の副王なりと稱せられ、露帝は西方に於ける喇嘛教の外護者として、天下統一の主權者として公稱せられつゝあるを見聞せば、蓋し思ひ半に過くるものあらむ、露蒙の接近斯の如く進み、延いて其計畫を亞細亞の高原ヒマラヤ峯上に及ぼさんことを望みぬ、此に於てか使を派し書を致して西藏國王即ち達賴に通す。

兼ねてより獨立思想を抱ける彼達賴は、這般の交渉をうけ意思相通し、共に其大業を遂げんことを諾し、着ゝ其歩を進め、藏蒙兩民互に呼應するに至る、これ單に胡圖克圖の意によるにあらずして、露の東方經營策と相關聯するものあるを忘るへからず、乃ち達賴は彼れ胡圖克圖の手を経たる密書に應し、特に使節を露都に遣はして更に相互の密約を結ひぬ、北清事變の際、警報西より來りて世界の耳目を驚かせしものあり、曰く（明治三十四年一月臨時發刊『太陽』に依る）

中央亞細亞に於ける露西亞、西藏の千繁起り、露將プレトロウスキーか、喀什噶爾を勢力圏に入れし以來、西藏派遣の露國使節は、長日月苦辛の結果、拉薩の達賴喇嘛か使節も露都に遣はして其友誼を謝し、露帝にリブアジアに謁見せしむるに至りし所以也、英國に於て俄然と

して印度北疆問題の喧しきを致せり、云々

又當時の紙上に、

明治三十三年十一月二十五日發刊大阪毎日新聞に『グローブ』新聞より轉載して曰く、十一月三日のグローブ新聞は、西藏國王達賴喇嘛か、國使を露都に派遣して、其友誼を厚うせしめたりとの事を、聖得彼堡の發信によりて報道し、且つ附記して曰く、西藏は元來支那屬國にして、支那政府の頤使用する所のものたり、然るに今殊に國使を露都に派せるは、支那政府の使嶽に出てしものにあらさるか、若し支那政府の意嚮をも顧みずして、自ら此の擧に出てしとすれば、達賴喇嘛は或は其位置を危うすへきことあるへきを覺悟せさるへからず、記者は李鴻章か露國に款を通はるものなるを信せさる能はず、思ふに西藏と境せる英國の印度政府は輕々此の事件を看過せさるへし、云ふ。

又當時の紙上に外報を引きて論して曰く。

時に亦た世界の耳目を驚かしたる一事は起れり、即ち西藏使節のリブアアジアに來り十月十三日を以て皇帝に謁見したることは也、由來前藏、后藏の宗教政府は、全く外國と交通せざるを以て主義としたるに、露國は此の方面より印度に通するの道を求めんと欲して、今を去る凡そ一年半前に、蒙古出身の漢方醫學者バドマエフを使節として西藏法王達賴喇嘛の許に遣はし、寶物を贈りたりと云へは、此度の差使節はその返禮なるへきも、露國は元より之を利用して、政治上の目的を達せしめんとせしなるべく、使節に來りしものは法王達賴喇嘛の政府に於ける四大宰相の首座なりと傳ふれば、別して便利を感じたるなるへし、元、西藏は清國の主權の下に立つ屬邦なれば、清國を経ずして直接に外國と使節の往來をなすは違法なり、然れとも露國か清國公使の寓居せる鼻の先にて、この應接をなしたるは奇といふへし、西藏にして露國に附し時は印度に對する英國の位置に大なる影響を及すを以て、英人の嫉妬は尋常ならず。

露、蒙、藏の三國間に立ちて、往來交渉の任に當れるものは、主として

露領蒙古『ボリヤタ』人なるガーワン堪布其者なり、露の蒙古ボリヤタを侵略するや、其地方及び他の蒙古地方に對する經營上、蒙古青年を本國に連れ歸り、文明の教育を施し、業を終へは各蒙古地方に派遣して、各其適する業務に就かしむ、蒙古經營上頗る良好なる方法にして、彼れガーワン堪布は亦其中一人也、彼は穎敏にして、才氣に富み、一般の蒙古人よりも頭角をあらはし、露語に通じ歐洲の大勢に關する新智識をも有し、傍ら蒙古の文學に通ず、露の蒙古經營上最も有爲の人物たり、露の東方經營の伸長と共に、蒙古人を遇すること甚だ厚し、露領ボリヤタ地を經營するに、彼れ與りて力ありしかは、露國政府は彼れに娶はすに、露國夫人を以てするのみならず、皇帝より大勲章數個を賜ひて其功を奨励し、露の東方經營上一個の大官として優遇せらるゝや久し、後不幸にして彼れが妻露國婦人は死せしかは、彼は甚だ落膽せり、露政府は彼を勵ますに、蒙藏に對する密意を授け剃髮喇嘛と化し、莫大の資金を給し、遠く西藏に留學せしむ、彼れ西藏拉薩に於て西藏語を研究する十有餘年、曾て文明の教育を受けし明晰なる頭腦を以て、西藏文學を研究せる事とて學識遙かに衆を超へたり、彼はセーラ宗教學林に於て學ひつゝあり、時に達賴の政府は、達賴の侍講を選ぶにセーラ學林、レボン學林、ガルダン學林より拔擢するに至り、彼れガーワン堪布は數萬の學生中より選はれて、侍講の任に就きぬ、彼れは達賴の侍講となりてより、支那政府の不振を説き、英國の北侵をほのめかし、今や西藏國の危機眼前に迫るのみならず、喇嘛教の運命外教に躊躇せらるゝの憂を語り、且つ世界の大勢を論じ、廣大なる露國の地圖を示し、勢力の偉大なること世界の何れの國と雖、匹敵すべからざるを述べ、露帝は近き將來に於て世界統一者として立つのみならず、又喇嘛教の外護者として、君臨せんとするの豫言あるを説き、喇嘛教經典中より是等豫言に關して偽作せるシャバラ經を引用して證據となし、經中の所謂外護者は即ち西藏を去る西北の國にあり暗に露帝を指し、支那政策を離れて、露の援助によりて英の北侵を防ぎ、自國の獨立をすゝむるや、實に巧なりといふべし、曾てより希望せる達賴の意志は彼の勸説と相投合して、暗流の中一條の線は通せられたり、彼れ堪布は達賴の意志稍ゝ動くを見て、之を露に報せん爲め、自ら西藏より印度に出て露都に至る、而して西伯利亞鐵道によりて蒙古に歸へり、西藏に往來する幾返、其間常に露帝より贈るもの黄金、寶物銃器其數を知らず、文明の利器は達賴の眼光に映し、達賴の満足や甚だ大なるものあり、而して前後兩藏に於ける諸學林に教育資金を寄附し、

各學生に學費を與ふること數々、或は拉薩の黄金塔、セーラ大學の金壁燐燐として、まはゆきものは彼れ露國の修繕せる賜なり、此に於てガーワン堪布の名聲噴々として四方に喧傳す、彼は露の密意を遂行せん爲め、達賴と謀り、西藏政府の一切の權力を獨斷して其意を恣にするに至る、英の北侵に對する軍備糧食の供給を仰かん爲めに、露國より新器械を輸入し、造兵局を設立し、拉薩を去る北邊一里餘の山間溪谷に工場を設け、水力電氣を以て貨幣を鑄造し、一は人民の便を計り、一は軍備に充つ、從來支那銀一兩に付、西藏銀貨七個を以て交換する相場なりしに、新器械の鑄造によりてその相場を一變し、銀一兩に付十個と交換し、以て人民の利益を計れり、於是乎藏民彼の功を奏し、彼の徳を謳ひ、彼を崇拜すること神も啗ならず、如何なる婦女子と雖、彼の名聲を知らざるなきに至る。

我か三十一年、夏、達賴國王は普陀拉宮を出て、拉薩に行達せし時、彼の勲功を賞して堪布なる學位を授與して公然政府に出入せしめ、達賴の顧問官として普陀拉宮城に住せしむ、漸次達賴配下の政府の權限を剥奪し、立法、行政一切の實權を吸集し、達賴と共謀して兵備、財政等皆教權より發布せしむ、之か勢力の應援としては拉薩の各學林の教授博士及び學生の力による也、ガルダン學林の教授博士の顧問を廢したるは、ガーワン堪布の入りしか爲め也。

かくて露藏の接近益々其度を加へ、更に蒙古を併せて一丸としたる露の東方經營殊に滿洲問題の迫れるに際し、露は藏を通して英領印度に對するの機略を講じつゝあり、先づは茲に北侵の策を廻らすに至る、而してブータンシキムを其勢力範圍に入れ、進て從來支那に朝貢を絶たさりし、ニポールをもそか手に入れて懷柔せり、ニポール人の拉薩に貿易せるを奇貨とし彼等を使喚し又カシユミール人の駐藏使節を通して、達賴配下の西藏政府の四大臣に結び、着々其政策を廻らし、莫大の黄金を贈りて彼等を籠絡し、座しなから西藏の樞要事件を知るのみならず、彼等を使喚して達賴に代りて其主權を握らむことを勧めたり、茲にデモ胡圖克圖なるものあり、達賴に次ぐの喇嘛なり彼は達賴の幼時にありては達賴を補佐し、達賴に代はりて西藏王璽を握り、清帝より國王代理權を任せられ、特に滿洲語なる胡圖克圖フクト（聖又は佛と譯す）の尊號を與へられ、以て優遇せらる、彼は達賴の幼時に於ける西藏國王にして、彼は此の機を利用して凡ての土地を自己の所有とし、自己の勢力を扶植せんことに汲々たり、英政府は乃ち彼の陰謀を知りて竊かに疑を通す、恰も達賴滿二十歳に達するの時なり、此時は即

ち清帝の定めたる例に従ひて、一切の権限を達頼に譲らざるを得ず、達頼王位に即きしより國務を見ること數年に及んで、支那政府の威力西藏に及はざることを察し、英領印度の北侵の急を見て自ら國是を定めんとする際に前述のガーワン堪布と邂逅して、益々其意志を固むるに至る、堪布の言を容れて西藏政府の立法行政を任意に改竄すると共にデモ胡圖克圖の非望を惡み彼が収め得たる凡ての權利を引上げ剩さへ彼を暗殺せんことを計れり、然らされは達頼の位置を危うするの恐ありと思惟すれば也、然れとも彼れデモ胡圖克圖を刑に處せんとするも公然其罪跡の認むべきものなきを以て冤罪に陥しいれんとせしなり、竊かに拉薩の東部カンバー地方に於ける舊教派の喇嘛三名に其意を含め、デモ胡圖克圖が呪詛禁厭を行ひ暗に達頼を殺すものゝ如くし、達頼の名を記せる符片を靴底に潜め、一は之を其地の寺廟に隠くして密法祈祷を修し、達頼の死命を祈らしめ、一は華麗なる金鑢にて製せる靴の底に同様の符片を縫ひ隠くしたるものを達頼國王に獻納せしむ、達頼は少しも知らざる風を装ひ其靴のあまりに華麗なるを訝り、不審の體にて其靴底をあはきしに、達頼を呪へる密符を發見し、驚きて警吏兵士を四方に派遣し陰謀者を捕獲せしむ、兵官等即ちカンバ地方より舊教の喇嘛三名の行動最も怪しきとて之を捕縛し來る、容易に其實を吐かず、拷問の極遂に其實を白狀す、秘密修法の教唆者は即ちデモ胡圖克圖なるを知る、達頼は捏造的證據の得たるを口實とし直にデモ胡圖克圖を捕縛し暗黒の内に投せぬ、陰謀を企てしデモ胡圖克圖もかゝる罪状は自己の夢たにも知らざる所、然れとも却て機先を制せられたるを憤慨しつゝ暗室に幽閉せらるゝこと數月、達頼より送り來れる鳩毒を仰きて死せり、かゝる殘酷の事をなしゝは達頼自らの意志に依るとは雖、其教唆者は露英の關係を熟知せる堪布に歸因す、當時拉薩都合の士民はデモ胡圖克圖の高徳を信じ居りしに、此の意外なる無實の死を知り公然達頼を非難する能はさるも、陰に物議騒然たりき、これ吾人の拉薩に於て事實上之を知り得たり。

達頼は外、露と交はり、北京政府と調和を取りつゝ南印度に對して獨立の希望を擧げんことに汲々たり、内、諸般の制度を改革し、人心を收攬しつゝ時機の至るを待てり、曩きに軍費の準備として銀貨鑄造所を送り、又兵器鑄造所を造りて軍備に充つ、竊かに人を印度に遣はし、甘言英人を誘引して拉薩の前面ウイチウ河畔を去ること遠からざる處に造兵廠を建てゝ英人三名をして監督駐藏せしむ、英政府は之を知ると雖、敢て關せざるものゝ如く装ひ、彼れ三名をして藏の状況を密察せしむ、達頼は英人三名に

藏婦人を賜ひ、以て永住の意を起さしむ、數百の藏人を工夫とし、其技を練習せしむること數年、英人等達賴の寛大に安して殆ど藏人の如き生活を送り、藏婦人との間に兒を擧ぐるに至りぬ、達賴は英人教師か西藏内部の秘密を印度に洩すの恐れあるを慮り、造兵工廠建築を特にウイチウ河の南岸に選ひ、彼の逃亡を防ぎ、西藏事情の漏洩を嚴守したり、西藏人か兵器鑄造の技術熟練せる機を見て、偽りて彼等を誘引して多年の功勞を謝し、一たび印度に遊還せんことをすゝめ、而して途上半にして其二人を暗殺せり、他の一名は彼等の誘引甚た訝かしきを見て、偽りて曰く、余は多年西藏に住し、西藏の婦を娶り、已に兒を擧げたり、今は西藏人に化したれば印度に歸るを好まずとて強いて辭せり、夜陰に乘し遠く拉薩を逃れ去り、九死一生の間ダーチリンに着、逐一印度政府に報告せり。

かゝる残酷を行ひし動機は、達賴それ自身の意にあらざるへきも、主として堪布の策たるや明也。

曩きには英人の暗殺事件起り、後にはデモ胡圖克圖の暗殺事件あり、藏民をして達賴の政策に就て疑團を生じ、其歸向に迷はしむ、西藏政府は達賴の權力大なると共に、かゝる事件を目撃するを以て自ら恐怖を抱き、自ら覺悟する所あらしむ、從て英政府によるの念を高からしむ、政府大臣の主なるものは、シャペイ、及びシャチヤの二名是也、英の北侵をして急ならしめたるは、我か滿洲經營と相待つものありしと雖、幾多の事情は纏綿し來ると共に、益々其北侵を早からしめたるは堪布の手を経たる露の政策侮るへからざるに起因せざるへき歟、達賴か使節を派して露帝に國書を致したるは、這般の消息を外界に發露したるに過ぎず、爾來露藏の往來は年々密度を加へ、亞細亞の高原を跋涉するものは、露の使命を齎せる北方蒙古の群隊にして、かくして日露開戦前に及びし也。

駐藏大臣の面前に於て藏王と露帝との親交なるに従ひ、英の對藏策も略は其目的を達せんとするにも拘らず、北京政府は何等の施設するなきを見て、達賴は益々自國の危殆に迫まれるを感じ、獨立計營に就いて堪布の勧めに任せ自ら露都に往きて、親しく皇帝と會見せんことを望むと雖、達賴の國外巡錫は必ず北京政府の詔勅を仰ぐの古例なるより、若し之を北京に奏せんも敢て裁可あるへしとも覺へず、去はとて自ら拉薩を出奔せんは、清帝を蔑視するの咎あるのみならず、必ずや何等の故障を生じ意の如くならざるも斗り難し、此に見、彼に考へつゝありしに偶々達賴配下の西藏政府か英領印度と竊かに交通して、何等かの陰謀を企てしを傍觀しつゝあり、

英國は遠く東方滿洲の野に日露交戦の機に乘し、西藏大臣の導きにより、遂に兵を西藏に入れ、拉薩を去る三日里程の處まで進入し來りし時、達賴は英兵の輦下に肉迫し來れるを知らさるものゝ如くし、普陀拉宮殿に住しつつありしか、始めて氣附きし態を取り忽皇として夜にまきれ、拉薩を逃れ出たり、正に出奔せんとするや、ガルダン學林の大喇嘛を召し、達賴の私印を授け、後事を托して七名の侍従を伴ひ、堪布の導きによりて道を急きたり、これ實に清歷光緒三十年五月十七日也、達賴の此の行、英兵の進入によりて、かねて期待せし所に協ひしや明也、彼れナクテウに於て牛馬を徵發し、同七月二十七日「セダンパ」に着し台吉諾爾領地に於て彌陀と觀音に關する講演をなしたり、事は當時吾人の北京日本公使館に致せし報告書に詳かなりしもかさねて左に之を記載せん。

報告書 北京日本公使館に送りし者

光緒三十年四月上旬、阿嘉胡圖克圖當地出發、回燕の途に上りし際、當時西藏及蒙古に於ける大略の事情の報告書を轉送致させ申候、定めし御落手被下候事と存候、該書中に報告に及び候通り、本年舊五月初八日當地發青海を経て西藏の途に上り、同月二十七日セダンパに到着、六月十日ネーチウに到着仕候、塔爾寺より東科爾に至る一路は平坦なるも、東科爾以西は處々唐古忒人種黒き毛張房に住し、牧畜を業とすれとも概ね剽悍にして馬賊を職とす、百餘の隊群にあらされは、通行甚た難し、地勢は天山南路と西藏山脈との間に狭まり、曠漠自然の草原をなし、夏期尚降雪す、地味黄泥黄河星海の涯溜する所、一步毎に馬脚泥中に没し、若し誤りて一步泥水に投せは、身を起すこと能はず、騎馬頗る難、加之、空氣の稀薄なる到底身體の軟弱者の堪ゆる所にあらさる也、一鞭を擧ぐれば騎者忽ちに呼吸を絶せん、然らすんは駄馬喘々として顔色土の如く癰腫し、眼球紅邊頭疼骨節痛み、誤りて疾く馬を下らむか、氣絶するもの少なからず「セダンパ」より「ナクテウ」に至る約一カ月間は全々かゝる地勢にして、茫々幾千の空地のみ、泥鹽にあらすんは滙水也、青海よりセダンパに至る途上、唐古忒人種の馬賊横行し、入藏者の前途を要し、行客を脅かすこと常也、故に入藏者は當塔爾寺^{タルス}に來り、諸方の來集人を待ちて、隊伍を組織し入藏するを例とせり。

小生は本年舊四月彼等の群集に混して入藏する能はさりしも、幸いに舊五月黒龍江より來れる蒙古人バールン堪布の露命を齎らして、達賴喇嘛に

使用する一行に混して入藏するを得たり、該堪布は露銀三萬兩を齎して、本年三月上旬當地に來り阿嘉胡圖克圖に露書を呈し、阿嘉邸内に於て馬騾百餘頭を購求し、舊五月初八日に單獨に入藏す、一行五十餘名なり、吾等は此一行に混し、セダンバに至り、次て曠茫無涯の空野を辿ること十三日にして、ネーチュウに着す、途上藏人六十餘名の馬隊に遭遇す、即ちこれ達賴喇嘛密亡の前驅也、吾人か先年よりの觀想の如く、達賴は北京朝廷の命を奏せずして、露帝に依らんとし、舊五月十七日の夜、西藏拉薩を出奔して此に來れるを見て事の重大なるを思ひ、達賴の動靜を觀察せん爲め、彼等前驅と共に台吉諾爾^{タイチノール}領に至る、彼處にありて待つこと數日即ち舊七月二十五日午後三時達賴一行台吉諾爾に到着す、前報の如く達賴はかねてより露使ガーワン堪布と計り、露に依りて西藏蒙古人を糾合し、清朝の主權を離れ、獨立を計らむと志しつゝありしか、昨年印度兵の侵藏を口實として拉薩を出奔し、達賴は近臣七名の外、何者をも伴はず、ガーワン堪布は蒙古ボリヤタ人七十名を引率し、達賴を擁しつゝ急行臺吉諾爾に到着せる也。

達賴本年歳三十三、僧衣を脱し、黄色の蒙古服を着、帽も亦黄色にして開祖宗喀巴^{ソンカパ}の被れる圓錐形^{ツツミガタ}のものを頂きたり、一見蒙古喇嘛の如く騎馬衆に混しつゝ何れか達賴なるを識別する能はず、然れとも氣品高く體肉肥滿、顔長褐色、鼻高虎髯、額廣く眉秀て、眼光爛々人を射るか如く一見非凡ならざるを知る、七月二十五日着、二十六日休息、二十七日達賴は所在の蒙古人を曠野に集め、自ら天幕の中に座し、彌陀經に關する一講演をなしぬ、老若男女群集其數六十人餘と註せらる、茫々たる原野瞬間にして人馬牛駱を以て充たされ、宛も軍營の如し。

禮拜者の獻納頗る多し、青海の五旗、「チヨン」、「オムシ」「バロン」「チャサツク」、「コルク」の中、前二旗王は直に銀塊三十個（一塊五十兩つゝ）馬八十頭を獻し、併せて達賴前退に關する一切驛路の差役を辦せんことを諾しぬ、「バロン」、「チャツサツク」の二王は、達賴か北京廷の路票を持するにあらずんは、決して他領へ行幸するの先例あるを見ず、請ふ開祖宗喀巴の靈廟塔爾寺に巡錫せよ、さらは如何なる差役をも辦せんとして、一面使者を西寧に馳せて辦事大臣に達賴の出奔を報せしむ、時に九月十一日也。

彼等禮拜者群集の中に、北京に至りて昨年冬より滿洲地方に於て日露衝突し、露國の敗北をきゝ日清英同盟の親交は到底露の抗すへからざる事實を傳聞して還り來るもの不少（吾人も此地に於て始て我邦の勝利を耳にせり）達賴は彼等の風聞をきゝ考ふる所ありけん、諸王の間に對して余は蒙

古大庫倫の大喇嘛チエブツンタンバ胡圖克圖を見んか爲めに、大庫倫に幸し、且つ先年北京變亂の際、露の占領に歸し今は露領ボリヤタ領に露より新廟を建築して安置せる二千餘年に亘る印度將來の梅檀釋迦佛を拝せんか爲めに敢て此行をするものなりと公言せり。

時に前五王の中コルク貝子^{ベーツ}は、達頼及ガーワン堪布の行動を疑ひ、偽はりて奏するに小王は將さに本年舊十月西太后萬壽節參賀の爲め北京に朝せんとす、達頼にして北方に幸せんとならば、小王代はりて其順路を護衛せんと、兵士六十人を引率して前記パールン堪布と共に達頼を擁しつゝ、舊七月二十九日臺吉諾爾を發し、八月五日コルク貝子の地に着、同月十日コルク發、西北嘉峪間を通して庫倫に向て出發せり、即ち達頼は滿洲に於ける露の失敗をきゝ心機一轉、露に落ち行くへかりしを轉して蒙古に向はん^とせし也。

前記パールン堪布は、阿嘉胡圖克圖の師傳にして、露命を齎らし塔爾寺に來り、阿嘉邸内に遇して馬匹を購求して舊五月入藏の途に上り、途上に於て達頼に遭遇しければ直に糧食銀兩を達頼に獻し、自ら携帯せる駄馬の大半を塔爾寺に歸らしめ、從者六名を伴ひてガーワン堪布と共に達頼に扈從し七月二十九日拂曉臺吉諾爾を發す。

青海の五王は年に北京に朝貢し、年に錢糧を受けつゝ青海地方を監視するも今達頼の逃亡を知りつゝ敢て之を道に要せざる所以は、一は達頼の威を恐るに似たるも、一は露蒙の勢を恐れて后日の憂あるを慮りし也、小生竊かに思へらく、達頼の出奔は拉薩の駐藏大臣已に此の事情を知り、急奏せしならんも今之を塔爾寺の諸の大喇嘛に計り、達頼を途中に喰ひ止め、開祖宗喀巴の靈廟に迎ふるを得ば、藏蒙の變動をして希は大ならしめざることを得ん、即ち七月二十九日パールン堪布の侍者と前后して臺吉諾爾を發し、舊八月十八日塔爾寺に歸へる、即日大喇嘛セルトクに報し、併せて其方法を諮詢す、三千五百の喇嘛始めて達頼の逃亡を知り、種々の妖言頓に起る、セルトク大喇嘛は其餘八十餘名の大徳喇嘛を召集し、會議を凝らし、即時一千名の唐古忒兵を募り、自ら之を統率し、問道嘉峪關に出て朔外安西喀密^{アンシーハミ}和闐^{ホータン}の峠關を扼し、以て途上に達頼を要し、事變の首魁ガーワン堪布の首を^カ刎ねんことを主張す、衆議此に傾かんとするの際、ヂヤイン喇嘛衆を制して曰く、土兵を引率して達頼を途に要するは可なるも、清帝の命を待たすして達頼の亡逃は如何なる意志に出てたるや測り難きものあり、若し輕挙にもかゝる非常の手段を取り達頼の意に反するあらむか、后

日如何なる憂ひを招かんも計り難し、如かす之を支那衙門に報し、西寧辦事大臣の指揮を仰かんには、即ち衆議此に決す、會議は十八日夜より十九日の晩景に至りて終る、同日二十日僧官二老爺（大老爺は喇嘛の位置にして二老爺はフルラオツヘは支那政府より授けたる事務僧官也、三千五百の生徒を監し、支那政府の干渉し能はざる權を有す、）（二老爺は一人の官名也）は西寧に馳せて達賴の出發を報し、併せて達賴を塔爾寺に迎へん爲めの路票を請求す、辦事大臣未だ達賴の逃亡事情を知らず、翌二十一日北京公文到着して始めて之を知る、即時驛傳を馳せて處々の峠關を扼し、達賴の逃亡を防かしむ、辦事大臣は通司二名を事務僧官に添へ達賴を路に要せしむ、塔爾寺諸大喇嘛は一書を僧官に交付し、以て達賴に奏呈せしむ、其代書人は阿嘉胡圖克圖（アキヤフクトウクトウ）の親任管家ゾバーゾンボなり、其西藏文意によれば。

三界の導師、閻浮提の妙王、大室護主、座下に奏呈す、蓮華藏世界、衛藏佛智に降臨せる觀音の化現者よ、五濁の衆生を導く平等無二の主よ、法雷長へに亘りて慈光風静かに法幢輝々たるの時、頓に教外の此の巡錫を見る、これ定めて深意あらむ、小比丘等の窺伺する所にあらす、若し教域巡化の故ならば、請ふ開祖宗喀巴の靈地に法駕を枉けんことを、昔しは拉薩事ある毎に達賴三世ソドナム、チャムソ、第五世ローザン、チャムソ、第七世カーゾン、チャムソ、の三輩皆此に巡幸せし例あり、仰き請す、大寶護主事變の急雲を際して、此の意を嘉納せは、希くは長く法燈を挑け併せて皇圓無窮なるを得んか、云々

辰の歳八月二十五日

私か思ふに、達賴は無人の原野を辿り、大小『トロコ』地を通過し、露都に急行せんと欲するも、若し途上に於て清朝官吏に要せらるゝか、或は何等かの事情に會せは、直に道を轉して大庫倫或は露領ボリヤタ地に至らん、幸いにして露都にゆくことを得は、然る後大庫倫に出てチエプツンタンバと共謀せんとは達賴の意志にして、又露の劃策せし所なりしならむか。

舊八月二十一日、西寧辦事大臣より塔爾寺に回送し來れる北京外務部の公文の意によれば、達賴の今回に於ける不都合の件數個を列挙せる中に、達賴は猥に一小人（ガーワン堪布を云ふ）の言を聞き、出奔せること一、北京朝廷の命を奉せずして他領に行かんとせること二、達賴は如何なる處に密幸するも、之を防止擁迎して一步も清國領土以外に逸せしむる勿れ、

これ三、若し事態不穩なれば兵力に訴ふるも敢て辭する所にあらず、これ四、云々。

而して九月九日かさねて同様の文面來到せり、文は漢藏兩様より來れり。

前述の如く、達賴は數年前より、露によりて獨立を計り、清朝の政策を脱し、蒙古西藏兩民を糾合して、以て志望を達せんとせり、然れとも其根元は達賴其者の意志發動にあらずして、之か教唆者は北方蒙古大庫倫大喇嘛チエプツンタンバ胡圖克圖是也、（チエプツンタンバは明朝時代に於ける喇嘛舊教に属する有名なる西藏史家ターラナータの世々の轉生として清朝の蒙古人民統一政策の爲め特に西藏人より選任せる大喇嘛なりとす）彼れ胡圖克圖は表面兵權を持たさるも其信仰威力は優に北方蒙古諸王を凌き傲然蒙古帝の如く、乾隆朝の外は世に數輩の轉生あるも北京に參朝せず、清帝の彼を召すあらは特費巨萬を要するを以て容易に行ふ能はず、益々彼をして専横を極はめしむ、「ハラハ」諸王は彼を全然蒙古帝の如く仰き、唯々諾々其命を奉しつゝあり、「ハラハ」人は蒙古人中最も慄悍にして往時戰闘強勇を以て名あり、元朝顔吉斯汗は彼を使驅して支那を征服し、后ち又彼を畏怖して「南口」に居庸關を築きて彼等の寇を防きたる史跡今以て存す、清朝の彼等を遇するに他の蒙古人と異りて特に汗^{ハーン}なる名稱を以てす、現にハラハ地に汗と稱するもの四王あり、即ち土謝圖汗、三音諾顏汗、扎薩克圖汗、車臣汗これ也、彼等は兵民二權を掌握してチエプツンタンバの信仰の強大なるを稱用して夙に清帝の制策を離れ顔吉斯汗の偉業を襲はんことを望み、ハラハ蒙民又其意を望みつゝある時、露の東方政策益々進み、先きにはボリヤタ地を占領せしかは隴を得て蜀を望むの折、ハラハ大庫倫をも勢力圈内に入れんと欲し、彼れ胡圖克圖の意向に接近し來り、彼を煽動し彼か欲望を果さんことをすゝむ、チエプツンタンバは清朝衰微の現勢を見て自己の望を遂げんには露によると共に、自己の郷里西藏國王達賴喇嘛と意氣相通し、藏蒙全擧して一は英領印度に抗し、一は清朝の羈絆を脱せんことを企てし也。

達賴を誘引逃亡せしめたるガーワン堪布は露領ボリヤタ蒙古人にして又チエプツンタンバ配下のもの也、達賴を逃亡せしめたるは、只露とチエプツンタンバとの中間に立ちて使命を果したるに過ぎず、達賴は十數年前よりガーワン堪布を介して露の意を傾聽するに至りしは、彼れチエプツンタンバ胡圖克圖の使喚によるなり、彼れ、胡圖克圖の密書か毎に露命と相待ちて達賴に關する所以の根元を知るべく現に達賴の逃亡に關して彼胡圖克

圖は叛旗を挙げ、蒙古帝たらんことを企てし也、此事は一般蒙古人の公言するに徴しても明也、當塔爾寺の喇嘛等か眉を潜めて曰く、今回達頼の他領出奔の意は大庫倫のチエブツンタンバ胡圖克圖其責任の大部分を負はさるへからず、清帝若し此意を知らは胡圖克圖の面目を損する少なからざるものあらむと嘆息せり、露の東方政策と相待ちて東亞の變亂を醸成するの禍源此にあり。

然れとも日本の滿洲に於ける大捷は、露をして意の如くならしめさると共に、今や日本の威光遠く西藏蒙古に波及び、露か到底日本に克ち得へからざると傳聞するに及んで露に往かんとして逃亡したる、彼れ達頼は半途にして心機一轉し、大庫倫チエブツンタンバ胡圖克圖に邂逅せんか爲めなりと公言せしむるに至りしも、亦滿洲に於ける我か軍の戰勝の影響に外ならざるへし。

臺吉諾爾滯在中の達頼の公言に徴せば、英領印度兵の拉薩に侵入し來るも汝等藏蒙人民よ、敢て憂ふる勿れ、彼等英兵のなすまゝに任せよ、予は現に「ハラハ」「ボリヤタ」地方にゆき、明年舊六月を期して、大庫倫チエブツンタンバ胡圖克圖の賀節に會晤し、明後年午の歳、又は羊の歳を期して歸藏せん、汝等予か意を體して心安かれよと、宜しぬ明年舊六月七日はチエブツンタンバ胡圖克圖の誕生節に當り、北方蒙古諸部落より參集群來し、競馬會武術試合等を催され、駿馬幾萬人語と相交はり、混雜するを毎年の常例とす、若し滿洲に於ける露の勢力にして強大なるを得は、明年舊六月の賀節を期して蒙古民心を収攬し、露援によりて望を挙げんと志せるものゝ如し、午の歳又は羊の歳を期して藏に還らんとの達頼の言は自ら此の邊の消息を洩せるものにあらざるか。

西藏蒙古兩民中、藏民は奸點にして虚欺多し、今や喇嘛教に對して信念甚た薄弱なるに反して、蒙古人は温順質朴忍耐力に富み、勞力に堪へ、喇嘛教に對する信念も厚く、信仰的統一洵に益々たり、財源又藏民より遙かに優り、西藏拉薩各大學林に於ける數萬學生の布施の大部分か、蒙古人民の渴仰せる信念の力によりて維持せらるゝを見て知るへし、若し達頼の自立するあらむか、其最も奉公するものは西藏人にあらずして蒙古人たらむ、本年は西藏本土人及び唐古忒人種、蒙民等は敢て變動するの意志なし、然れとも明年後に於て、若し達頼より何等かの消息を洩せば、亞細亞の高原一片の暗雲起らむも斗り難し、這般の觀測東亞永遠の平和に關して、等閑に附すへからざるものあるを覺ゆる也。

吾人旅行上の實驗によれば、青海より西方約一ヶ月間里程の處には、唐古忒人種と蒙古人種と混住すれとも、共に牧畜天幕の生活にして臺吉諾爾及ひセダンバンには多少部落を形成し青海十八王之を管す、臺吉諾爾より西北一帯は全藏無人の草原にして、西方一ヶ月間を経は「大トロコ」地に至るべく、北せは新疆を経て朔外喀密に至るへし、此の二路の外人跡の辿るべきものなし、臺吉諾爾より南約二カ月を経は拉薩に至るべきも、東西幾千里渺茫たる無盡の曠原、一萬六千餘尺の高地、空氣の稀薄は時に人命を損し、旅行の困難言語に絶す、臺吉諾爾は此等の中間に當る樞要の地たり、一朝兵を蒙古の地より入れんとするも、此の天險を如何にせん、西藏の背患は唯青海附近を扼せは可ならむ歟。

此等の事變に就き、卑見を左に陳述せん。

一、若し達賴にして露都に落ち行かは止みなん、幸に「ハラハ」大庫倫に落ち行かは、露蒙藏間の接近變動を醸すへければ、事により便に應し可成的速に北京に招致すること目下の要事たらむ、これ藏蒙兩民の對北京朝の向背に關する重要事たるのみならず、我か日本國の威力を達賴の目撃せしめは、東亞事變を處するに頗る便利多からむ。

一、大庫倫に於けるチエブツンタンバ胡圖克圖は藏蒙變亂を醸す首魁なれば、達賴の動靜如何を問はず、速に彼を北京に呼び寄せ、其責罰を正たすこと可ならむ、乾隆朝以來より蒙古にありて霸王の如く傲然として參朝せさる胡圖克圖の權利を殺き、併せて蒙古人民の清朝に對する向背を定むるを得ん、若し彼を北京に招くことを得は、啻に清朝の利益のみならず、又日本の國威を目撃せしむると共に、蒙古に日本の勢力を扶植せしむるに便ならむ。

一、露若し勢力を以て蒙民を煽動するを得は、ハラハ庫倫に於ける北方蒙古人彼れ先驅たらむ、現にポリヤタ蒙古人之に應せん、南部内蒙古王、及一般蒙古人は北京清朝の行動によりて、如何様とも變動すへし、然れとも若し達賴の命あらは、人間以上と信仰せる彼等蒙民は各自其勢役を辭せさるへし。

西藏にありてはデリゲー族、最も慍悍にして達賴の命あらは、水火を辭せさるへし、若し事變に先たちてデリゲー王を慰撫し置かは、頭目失ふて蛇尾振はさるへし、喀木族又勇悍にして、よく達賴の命を奉し、古來より支那四川、雲南に於ける厄介なる民族として視せられたり。

只唐古忒人種に至りては、如何に豹變するやも知るへからず、而して之

か信仰統一的頭目は阿嘉胡圖克圖是也、青海十八王は毎年北京朝貢の際彼等諸王を北京に招留せは、青海波静かにして、藏の後背、風起らざるべき歟。

以上の報告は光緒三十年舊十月甘肅^{アムド}安土塔爾寺阿嘉胡圖克圖寓居にて認む、寺本婉雅

八、英國と西藏との關係

亞細亞全局に渡る英露の關係近時益々接近し來れり、印度北境アフガニスタンの騷擾となり、波斯國王の干涉となり、延ひて蒙古に及び、西藏高原に波及し、東方滿洲經營と相呼応して着々伸長し來り、以て露國が西藏蒙古をして大に動揺せしめんと計劃せり、英も亦之が防衛を廻らさんとして、北境印度の防備を擴張すると同時に、西藏に對する政略を取りつゝあり、東方滿洲に於て日露をして衝突を起さしめ、露の勢力の他方に延長する能はざる機に乘し、對西藏策や已に熟せり、即ち昨年日本が滿洲の廣野に露權を制しつつある間に、各國の環視をも顧みず、兵を西藏に進めたり、當時支那政府は英領印度の不法を認めしも、何等の抗議を申込むこと能はざりしは、達賴の清朝政策を離るゝ計畫あると、西藏政府の英領印度と深交あり、之が手引によりて英兵の入藏したるものなるを知れば也。

達賴の露に傾聽するの益々厚きに及び、西藏人民の之に雷同附加して、西藏國の基礎を殆からしめんとの事實を看破して、英は西藏政府に通し其四大臣の中、シャペイ、シャター、の二人自己の位置を達賴に代はらむとの深謀を抱きデモ胡圖克圖を使嗾して其任に當らしめ英の後援によりて其目的を達せんことを計りたり、英は亦彼等政府を利用して西藏經營を遂行せんことに勉め、此に兩者相倚り、相待ちて其兵を入りしもの也。

されは英の入藏せる所以は、英獨力の計策にあらずして藏人誘引の結果なりと云ふを得へし、而して達賴出奔の動機を與へ、達賴の出奔は露の期待せし所なれとも、日露戦争に於ける結果は、達賴及び蒙古チエブツタンバ胡圖克圖の陰謀を頓挫せしむるに至らしむ、西藏政府の誘導によりて入藏せる英兵も、其計劃意の如くならず、即ち達賴の出奔は英兵に非常なる打撃を與へ、彼の逃亡によりて北變の益々大ならむを慮り、拉薩に留まること僅に滿一カ月、其間勉めて人心を慰撫し、喇嘛を優待せり、而して戦に競々として旗を巻き退いてチャンツエイ地に至りて駐屯するに至る、西藏政府と共謀せし入藏も其志を全うする能はざるは、達賴の出奔により

人心の攪亂を恐れ、一方には達頼と露の関係によりて亞細亞全局の變動を恐れたるに起因するや明也、滿一ヶ月の滞藏英兵は僅かに拉薩の地形を調査する位に過ぎさりしは、彼等の遺憾とする所、英兵の拉薩を引きよけたるは、達頼國王の一日も早く還藏せんことの手段に外ならず、達頼の西藏に還ると否とは印度北境に於ける重要な問題にして之によりて西藏策の方針を定むるを得ん、故に英は達頼の還藏を望まん爲め、諸種の手段を施して西藏人民を慰撫し、一面后藏に於ける副王班禪^{パンゼン}大喇嘛に結ひて、禮遇至らさるなく、漸く班禪の信頼を得てチヤンツエー地方に駐屯しつゝある也、若し達頼の出奔と共に副王の反抗を被らは、英兵の勢力を以てするも又如何ともする能はさるに至りしならむ、英の巧妙手段は幸に后藏副王の歡心を得て僅に對藏政策を進行しつゝある也。

吾人旅行の實見によれば、チヤンツエーに英兵五百を駐め、チュンピーに二百、ガントクに三百、其外樞要關峠に若干を駐め、印度ダーザリンよりチヤンチュに至る駐屯總兵數は約七千に過ぎさるも、其戦線に於ける秩序と聯絡を保ちつゝあるは、専ら后藏副王の厚誼によるもの也、英兵の退却を見て清國政府は漸く西藏國外に退却を迫るも、英は西藏に於ける鐵道敷設權と鑛山採掘權並に軍費賠償を交換的要求せり、而して此の要求は清朝政府其者との交渉を肯せず、直に達頼西藏國王と談判開始せんことを許容せられたる條件の下に支那政府より撤兵抗議を承諾せんことを申込み、相互の意志疎通せず、事甚た複雑となる、北京政府は天津道台唐某を辦理大臣として印度に派遣しカルカッタに於て印度總督と交渉せしむ、始め英は三權利を要求せしも、清の容るゝ所とならず、更に三百萬兩の軍費を減して六十萬兩となし、以て鐵道敷設權、鑛山採掘權を通過せしめんことを謀る、清使頑として之を可かさりしかは、印度總督怒りて、西藏問題は西藏達頼と直接交渉會議を開かん、此の儀清國政府の容喙するを許さずと斷言するに至る、談判此に破裂しぬ、道臺は此旨を北京に復命せり、英國政府は西藏問題を直に西藏達頼と議せんは政策上好望の位置にあり、此を以て達頼の還藏を待つや甚た切なり。

以上交渉問題は私の在印度滞在中の事件也。

然れとも達頼にして露と何等の關係を持して藏に歸るか、或は清と露と達頼自らの三者鼎立の協定關係を負ふて還藏せんも計りかたければ、這般の準備行動に對する政策として、后藏の副王班禪大喇嘛に親交を結ひ、他日の計をなさん爲め、西藏を二分し西部后藏を以て東部前藏に當らむとす

る計をなしつゝあり、これ印度政府か兵を西藏に入れしより、得たる勢力圏にして、又后藏大喇嘛の達賴に代りて自立せんとの深意と相關聯して英の對藏策に便益を與へつゝあり、然れともこれ英の消極的政略にして其積極的手段は達賴の還藏を待ちて施すにあらずんは東亞全局に關する全分の収局見る能はざるなり、英か達賴の急行還藏を望むも亦此にあり、達賴の西藏に歸ると否とは、藏印問題の解決如何に關す、併せて藏露問題の解決如何に關す、此の問題の前途如何によりて、そか波動は、新日英同盟を締結せる我か日本海岸を打たすんは幸也。

九、達賴國王と我國との關係

雪山の陰長へに眠りて世界文明の光りに照されざる西藏秘密國も、英北露南の寒風に驚かされ、千有餘年間保護者として仰き來りし清朝は遂に頼むへからず、祖國宗教の變動は其基礎をして危からしめんとするを憂慮し、民心の歸向を定め自立を計り、國境を防かんことに力む、同一喇嘛教によりて文化せる蒙古民族を支配せる強國と相應し、一方蒙古人か精神的統一者として歸依せる在庫倫のチエブツンタンバ胡圖克圖に結び亞細亞に颶風を起こさんと企てしも、滿洲に於ける露の戰敗は、いたく彼等の頭惱を打つと見えて藏蒙露の關係をして自由に行動せしむる能はず、達賴の出奔も無意味の畫餅と終りぬ、捲土重來北京を衝かんとの計も一場の夢と化し畢はんぬ。

西藏を出奔して露都にゆかんとせし達賴は、偶々青海地にて日露衝突の結果露の不利なるをきゝ心機一變して在庫倫に落ち延び、チエブツンタンバ胡圖克圖によりて事をなさんとせしも、意の如くならざるに憤慨し、チエブツンタンバによりて自己の位地を保つと共に一面北京に謝狀を奉呈し、罪を輦下に謝し、以て藏變の處置を請ひぬ、清帝は露藏蒙關係の真相を看破せしものか、達賴の辭を低くして之か處置を請ひ來りしを機として、彼を北京に招致せんとせり、然れとも公然北京朝廷の意志として達賴喇嘛を聘せんか其費巨萬を支出せざるへからず、これ支那政府の躊躇する所以也、然れとも此事は西藏民心の同情と蒙古人民の歸向に關し、延ひて清廷に對する向背如何に關する重要な問題なるを以て等閑に付する能はず、兎も角何等の處置を施すまで在庫倫に留め置きし也（或は云ふ五臺山に招きしと）清朝の意向として彼を北京輦下に招致し、清帝の威權を彼に目撃せしめ、以て西邊の變亂を鎮壓するの手段に供したきは、明白の問題也、待費の巨

額は清帝の悩む所豈遺憾ならすとせずや。

清の初、達頼三世を北京に聘し、以來、乾隆帝が五世を北京に招き以て師と仰ぎ、國賓として優待至らざるなき先例を残せるより、其後西藏達頼の北京に朝するもの其跡を絶ちたり、今回は達頼自ら西藏變亂を招きし罪を知り、彼自ら其責を免れんとしたるの參朝に過ぎされとも清朝も又彼を外にして亞細亞全局の禍源の鎮定を知るの道なきを以て、達頼を庫倫に留め徐に處置を付けんとするの意志なるへし、達頼の北京に朝すると否とは西藏蒙古に非常の關係を及すもの也、露は之によりて數十年間經營せる西藏蒙古策は殆ど斷絶せられ、清は之により二百餘年間藏蒙に失ひし威信を回復することを得ん、而して一方には藏印問題の横はれるあり、英の要求問題は清政府の容れざる所、英は達頼の還藏を待ちて談判を開かんと構へつゝある矢先き也、既に英は自己の獨力を以て速に達頼を護送し還藏せんことに、百万手を盡くせると雖、達頼の露に近くして英に疎かりし事情あると共に、清政府に取りて英藏直接の交渉は甚だ不利なる問題にして、清政府の喜はざる所也、然れども英は出來得べくんは自己が達頼に接近し、達頼をして還藏せしめんことを、清政府と後藏副王に迫まりて遂行せんことを講じつゝあり、而して清國は英國の意志を觀破する所あり、此を以て北京輦下に招聘し來らざる所以は、一は待費巨萬を恐れ、一は英國と直接の關係を生ぜしめさらんとする豫防策と見て、蓋し誤りなかるべきか、若し英にして此等意向なからむか、清廷は藏蒙統治上、待費支出の許す限り、之を輦下に招集せんやも計り難たし、清政府の達頼に對する利害より推測せば達頼を庫倫より藏に還らしむるは、將來清朝の蒙藏策に就て尠なからざる不利たるや言を待たず、若し待費の支出に困して、強いて庫倫に止むとせば、例へ達頼の滞在短月日なりとするも、達頼の庫倫駐筈は露をして、達頼に接近し舊交を温むるの便宜を與ふるものにあらずや、露が北京政府の煩を経ずして、直に達頼に通じ自由に政略を成功せしむるの機を與ふるものと見るも不可なかるへし、北京政府の爲めを云へば、速に達頼を輦下に呼ひて藏邊の責任を問ひ、今後の西藏策を確立すること必要ならむ、一時の待費を顧慮して、永遠の大計を逸するか如きは、獨り清朝の不利なるのみならず、亦以て日英同盟たる我邦の苦慮を免るゝ能はざるへし、清政府にして待費支出に窮せずんば、直に達頼を北京に招き、這般事變の責任を問ひ、今后に於ける統治策に就て共商するの利あるや明也、果して然らば、達頼の北京朝廷に参内すると否とは藏、英、清、露の聯關せる問題を解決する

と共に、露の勢力を排し併せて清國の利益を擴張することを得ん也。

語を換へて云は、亞細亞全局に亘る平和の曙光は此の一事によりて運命を卜知せらるべき也、達頼が北京に來りて清帝に直接會見することは、啻に清國の勢力を扶植し、藏印問題を解釋せらるゝのみならず、蒙古人心の不定なりし向背も確立すべく、陰謀を企てし在庫倫チエブツタンバ胡圖克圖に打撃を加へ、二百年間傲然として北方に覇立せし彼れが威權を殺きて北方に向ひし蒙古人心を一變せしめ、南方北京に趨向せしむるに至らむか、而して北京政府敢て之か方法を講ずる能はずんは、事大の波及する所少々ならざるものあらむ、之に對して何等かの方法を講じなは、東亞永遠の平和に關し其影響少なからざるを信す、愈々清帝にして之をなす能はずんは、友邦英國の希望に代りて我が日本政府か之を爲すを得は、日本の勢力を扶植するは勿論、支那は却りて日本の恩恵に感し其交誼を謝せんも知りかたし、或は支那が日英同盟たる我邦に對して何等かの疑懼を抱くの杞憂なきにしもあらず、されともこれ外觀の視察に過ぎざるへし、何となれば、清政府が眞實に蒙古西藏とを永遠に自國の蕃壁外障として之を保ち、亞細亞全局の平和を希ふ心たにあらは、支那が待費の困難なるより、支那自らなし能はざる所を、日本か代りて之をなしたりとて、支那の屬國たる蒙古西藏に何等の變動を與ふるの意志なく、露西亞の如き志望なきを明白に説破せば、支那は容易に疑團を氷解して日本の厚意を多とするに至らむ、而して英國の爲さんとして爲し能はざるものを、我が日本之を爲さば、英も喜んで賛成を表すべきや明也、此の一事は支那の利益にして又日本の利益也、同時に英國の利とする所ならむ、此事を外にして、日本の勢力を亞細亞全局に扶植する穩和の策は再び得難からむと信す、即ち露國が亞細亞に向て大經營を施すこと幾十年、苦心慘憺として今や漸く其端緒に就かんとする時に際して、一頓挫を來せり、若し此の一事にして日本が成功するを得は、恐く露の亞細亞經營を根本的に芥鋤することを得んかな。

幸にして日本が清朝に代りて之を爲すことを得は、將來の大發展に就いて大なる利益を得るや明白の問題也、日本が啻に達頼を北京輩下に誘引するに留まらず、清朝の利益を口實として、直接達頼を日本に觀光を促すこと、最も刻下の急務たる問題也、而して之に關して各國の關係を生ずる恐れある場合には、日本宗教問題として方法を行は、各國の疑懼を免るゝへし、教權制度より外なき西藏國王たる達頼喇嘛は即ち佛教上の關係よりして、日本の佛教者と相交通するも、敢て政治上に亘るべき非難は起らざる

へし、我政府にして外交上這般の方法を斷行すること能はすとせば、表面上日本佛教者の名義を以てするも、外交上の避難を避くこと易々たるのみ、此の轉に於て我國は最も便利なる位置を有するもの也、此の達賴を招く待費をは、我國政府全部之か支辨をなすの餘裕なしとせば、此の事を印度英領政府に交渉するも敢て差支なかるへし、英の計畫して爲し能はさりしものを、友邦の我れ之をなさば待費支出は英の喜んで諾せんも知るへからさる也、若し此の事にしてなし得へくんは、亞細亞に於ける平和の主宰權は我れ之を左右すると共に、新日英同盟によりて萬一の負擔を免るへからさる責任を事實上にあらはすに至らすして、東亞問題の解決を見るを得ん、之によりて露の亞細亞に對する劃策をも一變せしむる手段は、之を措いて他に良法なかるへしと信す、日本の勢力を亞細亞に普及するの必要な以上は、達賴國王と連鎖を結ふは目下の急務也、若し日本政府にして之を斷行すること能はすとせば、同一佛教徒たる日本宗教者を派遣して達賴と交渉し聯絡を通することは、日本の發展上大なる利益たるや疑ひなし、露國か滿洲問題と相待ちて亞細亞の經營を遂げんとしたるものは、よく西藏蒙古の國體に通し、這般の手段を巧に行ひしに過ぎさる也、啻に過去の事實として見るのみならず、將來も必ず同一の方法を以て進行するならむ、而して此方法たるや勞少なくして功を収むる大なれば也。

吾人か旅行上、ガーワン堪布（英人稱して、ダージェーフと云ふ）か露人と共に來藏し、拉薩に於て着ゝとして經營しつゝあるを實見し、吾人をして少なからず感奮興起せしめたり、又過日在印度駐劄武官東少佐より送り來れる私信に徴せば、

（前略）小生も近ゝ此地を去り仙境と號するカシユミールに赴く積り、本年印度中部デーリを中心として、これより西方は飢饉にて目下家畜は慘狀に陥りつゝあり、政府は救恤の方法を講じつゝあり、數年前よりペストと饑饉は屢々印度を襲ひ、前者のみにても、死者毎週六七萬とは何たる因果ぞ。

西藏ては政府も大に弱ておるらしい、露人は又拉薩に來ておるか、英人は何ともすることは出來ん、ダージェーフ（ガーワン堪布の事）は拉薩にあり、君はヨイ時に西藏を旅行せり、何處までも幸福であつた、將來の幸運を祈りつゝ（九月二十八日附、原文の儘）

支那大陸を隔てたる亞細亞の高原西藏は、滿洲問題の經營を急務とせる我に於ては何等の干係もなく、よし、干係ありとするも、其影響や甚た微弱なりとの感を抱く論者もあらんか、そは過去の夢にして、一顧の價たもなかるへし、日英同盟か亞細亞全局に亘りて擴張され、攻守同盟の責任を何等かの事變に對して果さるへからざる我にありては、英か焦眉を感せる藏印問題の轄決に力を盡すは、友邦の義務をして當然取るべき道にあらずや、而して同盟をして平和に終らしむるは、直に我國民の負擔を減少するものといふへし、即ち達賴招喚は、直接之等の問題を解決する必要條件たらずんはあらず、苟に此方法か西藏蒙古に於ける紛擾を解決するのみならず、併せて滿洲問題と密接の關係を有することは、吾人の嘖々を要せざる所なるへし。

喇嘛教の後援によりて起りし清朝は、祖宗より今日に至るまで喇嘛教を國教とし、西藏蒙古を統一し來れり、愛親覺羅氏の發祥地滿洲は又喇嘛教により治めぬ、所々に皇廟殿堂を建築し、奉天熱河の如きは祖宗の御陵として、長く清朝の無窮を祈り、喇嘛を派して祭祀を司らしめ、滿洲人悉く喇嘛教によりて支配せらるゝ也、かゝる現象は滿洲戰闘中に於ける、我同胞軍人の目撃せし所ならむ、日本にして滿洲經營に力を致さんとせば、其滿洲人の起りし所以、滿洲人の志想、信念の狀態、風俗習慣を察せざるへからず、民心の結合力は其人種の進歩發展の要素なれば、其民族の結合すると否とは、施設營上、大なる影響を蒙らざるへからず、即ち彼等民族の思想に投して適宜の方法を行ふは、爲政者の着眼すべき點にして、民心を収攬する第一條件たらずんはあるへからず。

去れば清皇室の大導師として崇敬を拂いし、達賴喇嘛の招喚は、滿洲經營上看過すへからざる重大の事なりとす、達賴の招喚事件は僅小なるか如く見え、一の宗教的閑話に過ぎすと雖、其影響の波及や全局に亘るものあり、東亞全局に對し平和の保障を以て任せる我邦に當然直下せる使命にあらずや、達賴喇嘛は近く支那領土に駐錫せらるゝあり、實に千載の好機會と云ふへし、此の機を逸して再び接近交渉せんとするも得へからず、彼の露國を見すや、遠く山河幾千里を隔つるにも拘らず、種々の方法手段を以て其驚翼を張りて、達賴と接近せんとするにあらずや。

若し此事にして日本政府か故障なく行ふことを得て彼達賴と接近の道を開くと其に一面在庫倫チブツンタンパの動靜を知るの便あり、従て滿洲經營に對し大なる利益あらむ。

達頼を我が國に引見するを得は、滿洲喇嘛教徒の人心を柔くるを得へし、現に露兵が滿洲に於て喇嘛教を迫害して民心を失ひしと聞く、これに付ても達頼の招喚は甚た急務なりとす。

英國ケンブリッヂ大學教授博士ウエーストレーキ氏、日英同盟に關し論じて曰く。

日英同盟を結へる我が英國は、英領印度に於て、ある強國と印度北方に干戈を交る事變起らば、友邦日本は何れかの場所に於て露を牽制し、印度に於ける英の負擔を軽くし、攻守同盟の責を負はさるへからずと。

此の言によりて見るも、西藏の高原は、日本と距離遠くして、殊に支那を中間に挟まむを以て、其影響を受くる少なかるへしとの論は、薄弱にして取るに足らざるや明かなるへし、若し高原に暗雲起り、朔外に颶風動かは忽ち波瀾は支那内部に及び餘波進んで日本海岸を打つや、識者を待たずして知るべき也、一波生し來りて全波を揺かすとせば、深く意を留めざるへからず、頑冥なる老帝國は、稍もすれば東亞永遠の平和を擾亂する禍機を藏するを以て之か動搖を未前に防ぎ、そか咽喉を扼すべきを講せざる限りは、東亞永遠の平和は望むへからず、乃ち達頼國王の招喚は其咽喉を握るべき、一大要點にあらずして何そや、目下の問題は是のみ、他は徐に計畫するも可なり。

若し此事にして成切せば、日英同盟をして條約明文以上の功を奏せしめ、西藏蒙古の人心をして、清朝をへて遠く日本に依らしむるの動機を起し、露の東方經營に根本的一大打撃を加へ、以て東亞の平和を擾亂するの禍機を壯絶するに至るや疑ひなからむ。

一〇、滿洲經營と新事業

今や平和は克復せり、滿洲經營に對する準備に一層の注意を拂はさるへからざるは云ふ迄もなし、併し其經營が從來の如く單に滿洲にのみ目を注ぎて滿洲以外に於ける事情を察し、之か着手を怠るか如きは、決して圓滿なる効果を取むること能はさる也、吾人の思惟する處によれば、日露の戦争は長く終結したりと思ふは誤りにして、或る年限の中、大なる衝突を見ること免るへからざる運命を有するは、日露兩國間の何れに於ても覺悟したる所ならむ、若し此の推理にして事實なりとせば、滿洲經營か一層の注

意と準備とを要するは無論のことなりとす、是を以て過去の滿洲經營の手段を擴張して、眼光を亞細亞全局に注ぎ其禍源を察し、其趨向する所を研究せざるへからず、滿洲問題の根底を固うするに於ては、必ず滿洲以外に翼を張るの要あり、露國の爲す所をみよ、決して滿洲のみ專注せずして、他に何等かの網を張り、一草一木と雖、彼等の手に入れずんば止まざるの風あり、而して經營といふ、已に空論あらざる也、單に實力を収むれば可なり、吾人の滿洲問題と相關聯して最も必要を感じしは、新事業を經營すること是也、これ吾人か一個の空論にあらずして、吾人か修行中、實地踏査して深く胸中に貯へ來りしもの也、左に所見を述へん。

一、鹽湖採掘の件

二、軍馬改良、牧畜の件

三、羊毛牛皮輸出の件

以上の三大事業なりとす

第一、鹽湖採掘の事業

鹽湖の生産地は直隸省に含まれ居る蒙古多倫諾爾を距る東南地にあり、鹽湖を「チヨンホ、ノール」と稱し長城朔外蒙古に於ける有名なる鹽湖水也、天然の鹽湖にして結晶體をなす、採掘するに従ひ自然に浮ひ出つ、此の湖面約一日半里程の直系を有し、周回数日を要す、冬期は結氷と共に鹽も厚層の結晶をなす、鹽湖面上車馬往來するに至る、此の鹽は内蒙古全般に輸出せられ、蒙古人民の供給を仰く甚た多し、北清事變の際、太沽を閉鎖せられたるより、海鹽杜絶し、直隸省、山西省等は供給不十分にして困難に陥りたり、乃ち蒙古人はチヨンホ、ノール鹽湖を採掘して多倫諾爾より、西南張家口、宣化府を経て、北京に輸送し、山西省等に送りて北清に於ける鹽欠に供へ以て一時の急を凌ぎしことあり、其鹽質は純白ならざるも、俗に云ふニガリ少なく、自然の結晶體なるを以て、採掘するに従て湖底より浮ひ出つ採掘せずんば一定の分量より出でず、只採掘の勞を施さば無限に算出する遺利の最も大なるものとす、而して此の多倫諾爾一帯地方は承德府の管轄に屬し蒙古地とは雖、直隸省内の一洲に編せられれば、之か採掘權を得るに於ては、あまり困難の事情なかるへし、今日にまでの採掘は只蒙古人の随意に任かせ、其土地の蒙古人直接に管理せると雖、採掘は甚た自由にして、一回に數十丁の貨車を以て運搬輸出するも管理せる

蒙古人に収むる税金は只一兩より二兩内外を納むるのみにして、何等の制限もなし、此税金は即ち外蒙古の管理せる収入となるものにして、毫も支那政府の關する所にあらず、若し之を日本の或る團體若くは個人が採掘せんとする場合には、その輸出の順路は多數ありと雖、先つ多倫諾爾より豊寧を経て、灤平承德府に出て、南山海關に輸出するを最近距離とす、西、張家口に輸出するも可とす、若し又其鹽を輸出するに就て、あまりに土地不便且つ距離遠しとすれば、其鹽を内蒙古或は直隸省、若くは盛京省、遼陽等に輸出するも、其販路は甚た廣大なるものにして、決して徒勞に屬することなし、承德府朝陽府等は盛京省及び錦州府の背後に於ける蒙古地なるも、人口稠密、耕作甚た富み地味豊饒にして南都蒙古に於ける最も豊饒なる位置也、此二府は蒙古の第二都會たる多倫諾爾に次ぐの土地にして、此邊一帶は漢人と蒙古人相半を占め商業殷盛也、東南錦州府より東新民府に隣りて奉天に通ず、多倫諾爾より承德、建昌、朝陽は奉天に至る樞要の大道也、而して此等の諸縣は悉く直隸の管轄に屬するもの也。

蒙古地より外部滿洲を眺むれば、滿洲の事情は歴然として掌を見るか如し、多倫諾爾は直隸省に屬すと雖、北は大庫倫に通し、東は内蒙古を経て長春、喀爾賓、齊々哈爾に通ずる樞要の位置にして、南張家口を扼すへき要地也、地理上に於ては多倫諾爾は北邊と内蒙古との間に住すれとも、事實上萬里長城以外蒙古人の往來副湊する都會也、庫倫へ年々の輸出物は多倫諾爾を経て送らる、張家口と庫倫の中間を絶つへき位置にあり、南張家口山海關に通し、又内外蒙古に通ずる殆ど中心點なり、多倫諾爾の史上に徴せば、昔は漠々たる一草原に過ぎされとも、乾隆帝は蒙古統一の政策上此の地を相し、一の大伽藍を建て此に蒙古人の精神界を支配する大徳の喇嘛を置き、併せて每三年帝自ら此に巡視し蒙古諸王を召集し内外蒙古に於ける諸般の政治を諮詢し、勇悍なる蒙古人を慰撫統治しつゝ來りし所也、後ち雍正帝立つに及び、滿洲文字制定者たる章嘉胡圖克圖の功勞顯著なるを賞し此に新に寺院を建て彼を此に住せしめ、以て内外蒙古人の精神収攬所となしたり、即ち乾隆帝の建築せる舊廟を彙宗寺と名け、雍正帝の新廟を善因寺と稱し、平時にありては内外蒙古の師弟を入厚せしめ、一は喇嘛教を教育する場に充て一は全蒙古統一の政治諮詢の衙門とせり、之か爲め年々歳々諸方より移住するもの多く漢人の來りて商業をなすあり、人口稠密、草原變して一大都會となり、南部蒙古に於ける樞要の地となるに至る事實に於ては人員の稠密張家口に及はさるも、蒙古にしては甚た樞要の都

會たり、故に清朝は之を直隸省に収めて管轄し、支那小官吏を派して之を治む、此邊一帶は地味豊饒なるのみならず興安嶺の要南將さに盡きんとする處に位して、樹木繁茂し、大材の松多く産出す、牧畜と相並んで遺利潤澤寒冷なる蒙古地に其人民をして安らかに生活を送らしむ。

此の多倫諾爾より内蒙古を通し殊に興安嶺の山脈を中心とせる陰陽兩側は蒙古に於ける豊饒の地と稱せられ、西部の陰面はウチムチン、アルホルチンの二王の旗下に屬し、遊牧最も盛也、陽面東部はホルチンの旗下に屬し民醇朴にして遊優たり、多倫諾爾より此の山嶺を傳はりて北せは、又齊々哈爾の後背に出て、西伯利亞鐵道を切斷するの便を有す、内蒙古に於ては多倫諾爾を中心とし、東吉林盛京より北は外蒙の往來に當る必要なる商地なり、去は鹽採掘にして直接我國の利害を感せずとするも之か採掘權を得は此に一根據を置いて滿洲背面の事情を採求するの便あるのみならず、又採掘せる鹽をして内蒙古、直隸、盛京等に輸出販売の遺利多し。

國民の自活上欠くへからざる鹽にして、若し之か採掘權を得て輸入し來らば、國民の喜ぶ所にして、遠く歐州より來る外鹽の輸入資金を減して、近く面前に存在する天鹽を以て之に換へば採掘と輸出に要する費用のみにて、彼の天日製造鹽に要するか如き莫大の費用を減して大なる利益を収むるを得るにあらずや、若し夫れ支那政府が鹽の輸出を禁し、採掘を許さざる恐ありとせば鹽の生産地か已に蒙古にありて、蒙古人の管轄に屬するか故に滿洲軍が全然撤兵せざる時機を利用して彼等蒙古人と何等かの交渉を開始し、而かも採掘權を得る能はざる時は、一時蒙古人と協同し之を輸出するか或は、一定の規約を設けて蒙古内地或は滿洲地方等に輸出するも不可なかるべきか、支那官吏の直轄せざる之等の件を協定することは多大の困難もなかるへし、這般の件にして成就せば、輸出地は山海關のみならず、東方滿洲地方に輸出するには、長春以内に架設せる鐵道便利と相待ちて之をなすも可なるにあらずや、要は輸出するとせざるとに拘らず、滿洲或は蒙古に販賣するとせざるとに拘らず、該天然湖の採掘權を得ることは滿洲經營と相關聯して最も必要の事なりと思ふ、若し萬一採掘權か當局者の手によりて得ること能はざる時は、彼の鹽湖岸に宗教宣布の爲め、教會堂設立の口實を以て、之か交渉を開かは可なるへし、宗教宣布は支那至る處自由に放任しあれば、そか宣布の用に供すべき協會數地の必要なるは云ふまでもなし、殊に鹽出產地は蒙古とは云へ直隸省に包含しあれば宗教家の手によりて之か權利を得ること、左程困難ならざるへし、蒙古人民か日露戰

争によりて日本の威力を認め同一宗教の國民たることも認識するに至りしならむ、政治以外宗教の信念によりて漸次同情を寄せ相接近し來ることは強ち架空の論にあらざるへし、鹽湖採掘權の不可能なると否とに拘らず、此の附近蒙古に一地を相して根據地を置き滿洲背陰に於ける事情探求に備へ、一は他日の日露事變に充て、一は清朝か北方に依らんとする場合と、漢人自ら動揺する場合に於ても此等の要地は先鞭を着くることは必要なり、多倫諾爾は南滿州と相待ちて順天の北關を扼すへき樞要地なるへし、將來露國が大庫倫より張家口に至る鐵道敷設するあらむか、蒙古に於ける輸出品の權力は之によりて吸収せらるゝのみならず、戦闘なくして事實上蒙古を占領するの結果をあらはし従て萬里の長城によりて安眠せる清朝北京は直に其背を衝かるゝか或は之か爲めに北方に吸引信賴するの動機となるの場合なしとも限らず、今より將來の變動を豫期して、之か交通順路を切斷すへき要地を選び、北方より來れる露勢を勦滅せんは此地を措いて他に注目すへき要所あるを見ざる也、之か方法として鐵道敷設するも可ならむか。

第二、牧畜事業、馬匹改良

温帶地に於ける牧畜事業は甚だ簡易なるか如しと雖、其牧畜に要する勞力と經費とは多大を拂はされは好結果を収むる能はず蓋し獸醫學上の原則を應用し飼養するを以て雜種類の馬匹を意の如く産出して、馬匹の體格等見るへきものありて、之を温帶地に使用するときは、其用を奏すれとも、之を寒帶地方に使用する場合には、其効を奏使かたし、温帶地方に於て養成せられたる軍馬は其勞力の如何に拘らず、日々の馬糧を供給せされは、長時間の勞力に堪ゆること能はず、寒帶地に於ける馬匹は、豆麥の味たも知らざるのみならず、勞力は遙に温帶地方の者より優りて、一日一回の飼養によりて、十二、三里をも馳驅し、以て三ヶ月間をも堪ゆるを得、これ寒帶地方に於ける牧畜は天然的放任主義なれば也、茫漠たる草原に幾萬の馬牛羊を放ち、柵籬を設くるの必要なく、眼界の限る處、彼等は優々として逍遙す、夜となく日となく春秋の別なく毫も人爲の制裁干涉を交へざる也、故に柔順なること此上なし、而も勞力に堪え、寒風肌を劈く氷原に逍遙して雪を分けて枯草をあさり、自由に濶歩しつゝあり、人の之を御するも日本馬匹の如く頑固の惡質なく、寒暖計の用をなさゝる地にても、防寒具を準備するの必要もなく、又豆麥の馬糧を與ふるの必用もなし、我國馬

匹一頭を一兵士が御しかたきに比すれば蒙古に於ける馬匹は一人にて十頭内外を自由に御し得ることは吾人旅行上の實見によりて知ることを得、佛曉星を戴きつゝ寒風騎馬に鞭打ち終日奔りて疲勞を覺えず、夕陽西に傾かんとする時、乾燥の地をトして、天幕を張り、馬を曠野に放ちて空腹を充たさしむ、疲勞に疲勞を重ね、嚴寒の裡月下に逍遙し雪を分ちて枯草をあさり、殆ど一睡して疲勞を休むること能はさるうちに、已に東方の白むに及び、又馬を旅装して鞭を擧げて進む、かくすること數ヶ月、幾千里なるも長程勞力に堪ゆることは、吾人の實驗せる蒙古馬の特性也、蒙古の戦闘に勇悍なる史跡を存するは、かくして養へる馬匹によりしか爲め也、其牧畜せる幾千の馬匹と牛羊とは、僅に二三の人を以て監飼するのみ、翻りし日本の牧場を見れば、其體裁は文明と野蠻の差あれども、其實用の點に至りては、二者何れか優れるや、俄に判斷すべからず、如何となれば、温帯地の牧畜より生せる馬匹は體格の大と體裁の優美とに意を用い、平和の時に大道を濶歩するに適せんも、稍し寒帯地方に使用するときには殆ど其用をなさるか如し、日本内地に於て使用する馬匹は、日本内地國産、或は外國産を以て、之を供給し、其効を果し得へきも、若し日本の將來に於ける發展と共に、滿洲寒帯地方に多大の軍馬を用する場合には、温帯産の馬は到底其能力を發揮すること能はさるへし、本邦より多大の軍馬を輸送すると共に、之か馬糧をも輸送せさるべからず、且つ日本馬匹の如き、御しかたき馬匹は一頭に就て殆ど一御者を要するに於ては、御者も相應の人数を要す、去は馬數の多少は御者の多少に關す、又馬糧も之に伴はさるべからず、之等に關する時間經費勞力を總計せば、實に驚くべき結果を見るに至らむ、加之、温帯の馬を寒帯に輸出せば、防寒具をも時に施さるべからず、例へば十頭の駄馬を日本より寒帯地方に輸出せんとすれば、之に要する御者十名と馬糧と防寒具を備へさるべからず、反之、寒帯地方即ち蒙古地方に牧畜せる馬匹を用いんか、十頭の馬匹を使用するも、一人にて御し得べく、豆麥の必用なく、防寒の準備も要せずして頗る簡便に大輸送をなし得るなり、唯蒙古産の馬は體格稍小にして平和の大道を濶歩せしむるには、外觀の美を缺く點あるも、實用に於ては多大の効ありといふべし、去は日本の發展上滿洲經營上最も急を感せば、其方面に於て使用せさるべからざる軍馬は、可成其地方より招集するを便にして利あるを信す、將來軍隊の擴張すると共に軍馬の改良は又必然の結果なり、其寒帯地方經營の需用に應せん爲め、其方面に於て牧畜を開始すること最も必要ならんか、之

か開始は只馬種其者を購入して或一定の場所に放任し、自然的牧畜を營むを以て、經費節減上有利なる新事業なりと信ず、這般の事業は曾て日本人の夢にたも注意せざる所、蒙古地に於ける望み多き事業なりとす。

這般の計畫をなさんは、蒙古人何れの處に於て行ふも可なりと雖、主として吾人の實見によれば、多倫諾爾より以東内蒙古に及び、滿洲の北陰に於てなすを適當なりと認む、尚剴切に論せは第一條鹽湖採掘權を得ると同時に、鹽の湖畔に牛羊を放養して鹽業と相待ちて着手せは最も便利ならむと思惟す、鹽湖採掘權を得るを得は、同時同處に於て牛羊を飼養し得るは易々たる業のみ、幾萬の白羊、幾千の黒牛黙々曠野に散在するを見は、如何に天然の廣大なるに驚かざるものあらむや、若し牧畜事業にして滿洲經營と何等の關係なきものとせは、止みなん、よし、關係を有するものとしても、或る事情の許さる處より、否定せは止みなん、若しも平時にありては、かゝる牧畜を起すも需用の道なきを如何せんとの杞憂あらは其れは甚しき誤謬なりと云ふへし、日本内地にて需用の道なきとしても、蒙古に於て飼養せる馬匹を直に滿洲に送り、其剩餘を直隸山西省等に輸出して販路の方法を取らば莫大の利益を得るや明なり、況や吾人は滿洲經營に就ても、東亞問題に就ても、馬匹を改良して他日の事變に備ふるの覺悟なかるへからず、従て牧畜事業を蒙古地に起すは、決して無用のものにあらざるへし。

之を北方支那に於ける需用に見るに、凡ての馬匹は、支那内地の牧畜によりて供給せられたるものにあらすして、悉く朔外の蒙古牧場より輸入せられつゝあるを知らば、又需用の大なるをも知るへし、南船北馬と云へる古語は、蓋し北方支那か蒙古の牧畜場より多大の輸出を仰きて、その有望なるを事實上に示したるに、又以て茫漠たる朔外か如何に無盡の遺利に富めるものたるかを知るに足らむか。

既に論述せし如く、滿洲の背部に於ける研究か滿洲經營上に必要ありとせは、そか背部に一定の根據地を設け、永住的に居を占めて、諸般の事項を探求し、萬一の事變に備ふるの策、亦必要たるや明なり、若し漫に此邊に人を混して一時的視察を爲すも十分の真相を窺ふこと能はざるのみならず、却て支那及び各國の環視を惹くの恐あり、例へ牧畜事業を開始せすとも、彼の地方に確たる根據地を樹立せずんば、日本の發展上、甚た不利なりと感す。

第三、羊毛輸出の件

日露戦争の結果、益々軍隊の擴張を圖るへからざる事なり、去は軍備擴張と共に軍隊に要する被服等の需要は益々多きを加へ、之か供給を悉く外國輸入品に仰くは國家經濟上、不得策たるを免れず、出來得べくんは我れ自ら之か需用の原料を見出さるへからず、即ち蒙古に於ける羊毛或は獸皮は優に之等の需用を充たし得るのみならず、對岸距離近き滿洲の後背に無限の輸出物産あるを發見せば、滿洲經營と相待ちて頗る我國財源を緩かならしむる好事業にあらずや。

露、獨、英、米は已に此に着眼して、張家口に商館を設け、巨萬の資本を投し、これ等の有利事業を獨占し、漢人を蒙古内部或は青海附近に派して廉價なる羊毛獸皮を買収し、傍ら蒙古西藏の政治的事實を探くるの便に供しつゝ、莫大の羊毛獸皮を遠く本國歐洲に輸送して大なる利潤を嘗めつゝあり、我か商人も近來濠洲よりの羊毛輸出を減少して支那より供給を受くるも、そか事業は微々たるものにして、到底露、獨、英、米の計畫に比すべくもあらず、従て高價なる原料を輸入して、國民の需用を充たすこと能はざるは、洵に遺憾にして、國家經濟上最も不利なる極みならずや、去はこの事業を開始せんも、只長城以内張家口等に商館を設置するよりは、寧ろ進んで蒙古内に入り、蒙古人と提携して之を獨占し、無限の遺利の收穫を勉むるは、日本人の等閑にすへからざる事業ならずや。

此事は別に方案を廻らすの必要なし、只牧畜事業と相待ちて開始せば、甚た便にして利益あるや必せり。

要するに天然鹽湖の採掘は、即ち牧畜事業となり、延いて羊毛獸皮の輸出事業となるなり、三者は鼎の三足に似たるも、又一舉して二足をも擧ぐへし、而して此三者は滿洲經營上最も緊切なる事業たるを信す、國家か之を行ふ能はすとせば、個人にして之を行ふも最大遺利を拾ひ得るのみならず、國家發展の上に於て軍事、政治は云ふに及はす商工の實業に關し、至大の利益を與ふるや、余の保證する所なり。

十一、結論

西藏、蒙古、滿洲に於ける吾人の觀察は、他の政治家及び學者等の考察とは稍々其趣を異にし、人或は異様の觀をなさんを知るへからず、吾人の觀察をして、かく異らしむる所以は、是等の國體民族風習は世界の多くのものよりも異なり、支那東土の風習よりも全く其趣を異にし、制度文物悉

く別種の感あるに由る、乃ち是等の國體は全く喇嘛教の陶冶薰花によりて組織せられ、延いて政教一致の政體と化し、政權よりも寧ろ教權の大なるものあるを知らざるへからず、彼等民族の風習を察せんには、必ず這般の眼光を以てせずんば、正格なる眞髓を觀察する能はざるなり。

上來の觀察的報告文は蒙古人と化し、西藏人と化せる、吾人の眼底に映せし彼等教國民の眞相にして、支那本土其者と稍々趣を異にせるは、吾人か聊か意を注ぎし點なりとす。

以上の陳述は大要に過ぎすと雖、最も時勢に的中せるものあらむを信す、而して這般の事實か日露戦争と相待ちて發現せしものなれとも、單に過去の事實として輕々に看過すへからず、將來に於ても彼等教國の志望の豫期を充實發現せんとする思潮は亞細亞高原に迫はれつゝあるを忘るへからざる也、これ等の風向の衝突は何れにありやを、東亞問題と相聯關して觀察することは、又國家の急務たらすんはあらず、吾人は一波起る毎に日本海岸に怒濤の押し寄せ來らむを恐るもの也。

而して今や諸種の經營施設をなさるへからさる中に於て、其最も焦眉の問題として吾人の着手せんを考慮しつゝあるものは、西藏國王達賴招喚是也、既に記すか如く、彼れ達賴は露都に赴かんとして中途心機一變北方蒙古庫倫に落ち行し也、清朝は達賴を招喚し、一は責任を問ひ、一は自國の威勢を示さん必要ありと雖、待費の支出の許さるあり、又達賴それ自身の心情も穿ては露と藏蒙との關係より、亞細亞高原に變動を起したる責任を自覺し、北京輦下に伏奏せんと志望あり、若し北京に巡錫すること得へくんは、併せて日本に漫遊せんことを希望しつゝある也、人若し達賴か日本漫遊の事をきかは、何人も怪む所ならむ、吾人の報道觀察によれば、決して不思議なることはなし、乃ち達賴か日本に航せば、達賴か北京に對する藏蒙事變の責任を、日本の威光によりて輕減せしめ、且つ日本の同一宗教の力によりて亞細亞の暗黒を破らんことを信して、日本觀光の事を夢み、竊かに人を北京雍和宮に遣はして、そか交渉を開始せんことを望める、其達賴の意志を雍和宮に傳へ來りし使者はバルシー、ルビクと云へるものなり、雍和宮はこれ等の交渉を受けしも、敢て在北京日本公使館に計らざる所以は蓋し一原因あり、即ち明治三十四年夏、吾人か伴ひ來りし阿嘉胡圖克圖（双親王）か一たび日本の勢力を賞揚措く能はさりしも、歸國後露帝自らの招聘再三懇勸なるに感激し露か滿洲に於て日本と衝突するの際、彼をして達賴と、在大庫チエプツンタンバ胡圖克圖と三足鼎立せしめ、西

藏蒙古に反旗を翻へし、蒙古人を提けて北京の後背を衝かんと陰謀成就せは、露帝は彼をして蒙古の霸王たらしめんと密約を締結したる也、其結果吾人をして西藏に伴ひ行かんと約言を破棄し、吾人を途に棄て達頼西藏出奔に先きんして、青海^{アムド}安土を去りて蒙古に還錫したりかく、日本に對する厚情を無にしたる責任を恐れて、敢て雍和宮より公使館に交渉を避けつゝある所以也、或は彼れ阿嘉胡圖克圖か日本に對する恐なく、達頼の意向を齎せる使者の交渉を當時日本公使館に致せしやも知るへからず、かゝる交渉を得て之に對する何等の方法手段を行はざるものとせは、在公使館員は達頼の事情を察せざるのみならず、藏蒙滿清朝との關係露の取り來りし手段方法の原因を熟知せざるものならんと察するの外なし、若し雍和宮より何等の交渉を受けさりせは幸いの事なりき。

吾人か阿嘉胡圖克圖を日本漫遊に伴ひし旨意は、多大の意味を有したるも、當時政府は、單に宗教者の閑散事業となし、何等の注意をも拂はす空しく送り返へしたるは、残念の事なり、當時彼と何等かの意思疎通しおりたらんには、昨年に於ける日露戦争に關して、多倫諾爾より齊齊哈爾の方面に對し、蒙古を経て多少の活動を起さしめたるやも知るへからず、吾人の返す返すも遺憾に思ふ所以なり、然るに彼れ日本觀光を了へて、蒙古に歸るや、露帝は露蒙兩文より成れる親書を彼に呈し來り、彼を露都に招聘せんことを懇請す、若し彼にして此の意を容れは、露帝の喜や知るへし、彼にして水路南せは軍艦を派して旅順口に迎へん、陸路北せは庫倫の儀仗兵を以て迎へん水陸路二何れなりとも其意に任せんと親書の來ること前後三回に及ふ。

日本觀光によりて日本文明の偉大なるに驚きしも彼は遂に蒙古王たらしめんと露帝の意に感激して露の同情を寄せ、吾人を途に棄てし所以なり、露帝の彼との交渉は吾人の實見せし所、獨り異域にありて感慨措く能はさりき。

今達頼の心情は漸く露を去りて日本に倚るの心を抱き、併せて清朝に對する責任を免れんことを望つゝあり、英兵か西藏に入りし結果、英は西藏を支那屬國たるを認めしと雖、藏印の關係上英自ら達頼に接近せんことを望み、可成は英自ら達頼を擁して拉薩に歸らしめんと希望は吾人のよく知る所なり。

日本か英自らはんとして能はざる所をなし、支那政府か自らはざるへからざる事を行ひ、併せて達頼の望みを達せしむることを得は、東洋の

盟主たる我日本が將來の發展上、滿洲經營に就ても、日本の勢力を扶植するに關しても、大なる効果あらんことを信ず、眼光此に及はざる人は直に嘯語として退けんも、深く東洋問題に心を潜むるものならば、十分に傾聴して、且つ斷行すへき事柄なるを信ず、且つ過去幾十年間勞力と巨萬の費を投して収攬侵略しつゝ來りし露の勢力を打ち拂はんは、此の千載の機會を逸して外に求むる能はざるへし、若し此の一事にして成就せば、滿洲經營上多少の便益を得るのみならず、藏、蒙、滿、清とに對して圓滿なる結果を収め、併せて日英同盟上有効なる關係を生せん。

吾人の論旨此に盡きすと雖、徒に煩雜冗漫に流るゝを恐れ、左に要點を摘録して吾人の所見を補はんとす。

- 一、將來日本の發展上滿洲經營と關聯して滿洲以外に緊切なる經營施設を要する事。
- 一、日露衝突が將來に於て亦免るへからすと豫定し、滿洲背後に根據地を定め、經營を要する事。
- 一、調査或は經營の一方法として、滿洲の背後或は蒙古内部に、鹽の採掘、馬牛牧畜、羊毛輸出等の新事業を起し、之によりて、其方面の經營を行ふへき根據地とする事。
- 一、是等の新事業は政府と民間の實業家と相待ちて經營せば、最も其實益を擧ぐるを得ん。
- 一、諸種の經營中目下の問題は、將に西藏に還らんとつる、達賴國王を北京に招喚し、出來得へくんは、日本に觀光せしめ、日本の勢力を座しなから、亞細亞全局に扶植せしむる事は也。
- 一、達賴招喚の事は、英國若くは支那の爲さんとして爲し能はざる所、日本代りて之を爲さは支那英國の恩恵を與へ得へき事。
- 一、達賴の北京或は日本の觀光によりて政治的嫌疑を各國より招くことある場合には、日本宗教家の名義を以てせば其非難を避くるのみならず、且つ容易に實行せらるゝへし。
- 一、若達賴招喚にして日本が爲す事を得は、兩者親密の關係は勿論、新事業問題或は藏蒙の研究をなすに便なる事。
- 一、達賴招喚事件にして、正當なりとし、且つ必要とせば、速に着手斷行を要す、遅くも來年三月を過くれは、空しく此の機を逸する事。
- 一、這般の事情の着手に就て、經費支出に顧慮する點あらは、印度政府に計る事、印度政府は喜んで諾すへし、何となれば達賴招喚は英國

の曾て望んでなし能はさる所、日本代りて之を行はんとするに於ては、英の同情を得るや明也。

一、達頼招喚の事も亦新事業の事もなし能はすとせは、せめては達頼か支那帝の招喚によりて或る地方に巡錫する際、我か政府は日本宗教代表者を派遣して、達頼との親交を結び、以て亞細亞全局に關する攻守同盟の實を充す準備とする事。

一、滿洲經營と聯關して、諸方面に於て種々の經營をなさゝるへからさる中に、蒙古西藏に關する調査討究は日英同盟と離るへからさる關係を有す、而して其調査派遣の地は左の處最も必要なるへし。

一、從來重慶成都等の近き支那内地に視察派遣を擴張して四川省打箭鑪に駐在派遣を必要とす。

打箭鑪は西藏と四川省との交通樞要點にして、北京使節の西藏へ往來する官道にして、西藏輸出品の商口也、清、藏兩間の事情を調査するに最も樞要なる場とす。

二、北方に於て西藏支那及び蒙古の事情關聯を調査するには、甘肅省の安土塔爾寺^{アムドタルス}に派遣せは、青海の事情を知るのみならず、藏蒙等の事情を明白に知るを得、若し又西北蒙古と西藏との交通事情を調査せんと欲せは、甘洲、涼洲、肅洲に人を派せは、嘉峽間の内外をへて、安西、玉門、伊犁及び蒙古露西亞の關係を知ることを得へし。

三、北方蒙古の事情を知らんと欲せは、宜しく蒙古第一の首府大庫倫に人を派遣せさるへからす、全蒙古に於ける中心者たるチエブツンタンバ胡圖克圖と露との關係を詳細に知り得るのみならず、蒙古全體の人心如何を觀察することを得、北方蒙古の事情、露西亞の蒙古に對する經營等を視察するには、必ず此の庫倫に人を派するの必要あり。

四、將來滿洲經營に聯關して、蒙古方面の調査を研究せんと欲せは宜しく蒙古の第二の首府、多倫諾爾^{トレンノール}及び其附近に根據地をおき、東北は興安嶺に沿ひ、ウチュム、チン王、アルホルチン王、ホルチン王、ハルチン王等の各蒙古王と親交聯絡し、哈爾賓^{ハルビン}の背後より齊々哈爾^{チチハル}に出つへき聯絡を取り、此等の地方の調査は最も必要を感す、又東南は多倫諾爾より豊寧、灤平を経て、昌徳府を経て建昌府に出て、朝陽縣より昌圖に出てゝ、長春より旅順に至るへき

鐵道と聯絡すへき吉林盛京省の後背内蒙古の調査は滿洲經營と相關聯して、最も缺くへからざる樞要の地たり、若し將來支那帝國か、文化の域に進み、日本の依頼を離れ、反抗的態度を取る場合に於て、露と接近の行動を醸すことなしとも限らされは、其時の準備計畫として朝陽縣昌德府より多倫諾爾を経て、獨石口に出て、一は西方張家口を扼し、一は南部北京の後背に出つへき計畫の調査は、營口より、山海關をへて北京に出つへき順路と相待ちて最も必要なるへし。

- 五、要するに、今回の日露戦争は、一旦其の終結を告げたりと雖、近き將來に於て再び衝突を免るへからざるを自覺せる以上は、滿洲經營と日本の發展上に關して滿洲に接近せる内蒙古地に根據とすへて詳細なる調査研究をなし、以て將來の變化に備へざるへからず、而して此等の調査をなさんと欲せは、宗教家の手を用いるか、若くは新事業を起して、各國の嫌疑を避くることも必要なりと信す。
- 六、達賴國王拉薩を出發せし後、北京政府は勅書を後藏副王班禪大喇嘛に呈して達賴に代りて全西藏王の位置を繼かしめんことを圖る、彼副王は自ら其器にあらざるを理由として勅命を固辭せり、蓋し彼は達賴の位置を襲はゞ前藏に於ける一般藏民并にセーラ、レボン、ガルダの三大學林の博士教授學生の反抗あらんを恐れ、且つ出奔せる達賴か、蒙古、露西亞の聲援を藉り來れる勢力に抵抗すへからざるを知り、例へ自己か全西藏王となるも、これ等の反抗を鎮壓すること能はざるを自覺したるに由る也、其結果副王は英政府に傾きたるは、萬一の場合達賴に反抗して其位置を保たんか爲め也、支那政府は達賴を除いて西藏を治むること能はざるを以て、是非其彼を西藏に還らしめざる必要ある也、此の事に徴しても達賴の勢力か西藏を支配しつゝある偉大なることを知るへし。

以上の報告意見は滿洲經營に關して、目下焦眉の急と認めたる事項の大意に過ぎず其他政治上軍治上に關して必要なる藏蒙等の地理歴史、制度文物等の條項を記載せんと欲せは、優に三千枚以上に上るへし、到底短日月の及ふ所にあらず、そは改めて他日を期して報告せんと欲す。

歸朝早々塵事蜩集、筆、意と從はず、十分の志想を述ふること能はざるは、殊に遺憾とする所なり、若し夫れ杜撰の點あらは、切に寛恕を祈る。

右及御報告候也

敬具

明治三十八年十一月廿七日

寺本婉雅

【本文中改稿箇所一覧】

1 章中

- ・興熙乾隆の世に→康熙乾隆の世に

2 章中

- ・世襲的政治上の→世襲的政治上の

3 章中

- ・蒙古と藏西との往來たえたることなし→蒙古と西藏との往來たえたることなし

7 章中

- ・即ち西藏使節のリブ亞細亞に來り→即ち西藏使節のリブアジアに來り
- ・差役を辨せん→差役を辨せん
- ・ブータンシキムヲ→ブータンシキムを
- ・辦事大臣に達賴の出奔を報せしむ→辦事大臣に達賴の出奔を報せしむ
- ・西寧辦事大臣の指揮を仰かん→西寧辦事大臣の指揮を仰かん
- ・辦事大臣未だ達賴の逃亡事情を知らず→辦事大臣未だ達賴の逃亡事情を知らず
- ・辦事大臣は通司に→辦事大臣は通司に
- ・西寧辦事大臣より塔爾寺に回送→西寧辦事大臣より塔爾寺に回送
- ・胡圖克圖の使族によるなり→胡圖克圖の使噶によるなり

8 章

- ・天津道台唐某を辦理大臣として→天津道台唐某を辦理大臣として

9 章中

- ・秦の初、達賴三世を→清の初、達賴三世を
- ・動靜を知のる→動靜を知るの

10章中

- ・北津事變の際→北清事變の際
- ・協會敷地の必要なるは云ふまでもすし→協會敷地の必要なるは云ふまでもなし

【付記】

- 本研究は JSPS 科研費 JP18J22977 の助成を受けたものである。